

アートに告白しよう。

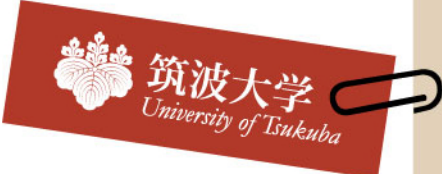


| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大 | ア | 高 | 第 | |
| 賞 | 丨 | 校 | | 5 |
| | ト | 生 | | 回 |
| | ラ | | | |
| | イ | | | |
| | タ | | | |
| | 丨 | | | |

| | | |
|---|---|---|
| ラ | 宛 | ア |
| ブ | ア | 丨 |
| レ | タ | ト |
| タ | | に |
| 丨 | | |
| 。 | | |

優 秀 作 品 集

2014



第5回高校生アトラライター大賞

高校生アトラライター大賞とは
アートについて自分の言葉で考え、伝える力を育む、高校生のためのエッセイのコンテストです。
2005年から一年おきに、筑波大学で開催しています。

課題 アートとあなたとのかかわりを、2000字のエッセイにして送ってください。

募集部門

- ◎ 制作体験 自分が作品をつくった体験をもとに書く
- ◎ 作品探究 アーティストがつくった作品について書く
- ◎ 芸術支援 アートと人々の交流について書く

応募できる人 高等学校ならびにそれに相当する公的教育機関に在籍する生徒。

賞〈賞状ならびに記念品〉 大賞3編 / 優秀賞 / 学校賞

応募締切 2013年10月15日（火） 結果発表 2014年1月、ウェブ上にて

選考委員 ゲスト選考委員（五十音順）

穴澤 秀隆 『美育文化』編集担当

奥村 高明 聖徳大学教授（前国立教育政策研究所教育課程調査官）

熊倉 純子 東京藝術大学教授

芸術専門学群選考委員

守屋正彦（芸術学専攻） 柴田良貴（美術専攻） 笹本純（構成専攻） 山中敏正（デザイン専攻）

芸術支援コース選考委員

岡崎 昭夫 齊藤 泰嘉 直江 俊雄

学生選考委員 筑波大学生

条件

2000字以内で、個人が日本語で執筆したもの。図や参考文献一覧等は文字数に含まれません。文章の題名を各自でつけてください。
小論文のように論題を設定して論理的に考察しても、体験報告や随想のように個人的な思いを中心に語っても、雑誌や新聞記事のように伝えることを主眼にしたものでも構いません。

「アート」の範囲は、美術やデザインを中心とした視覚芸術を想定していますが、執筆者が自由に判断してください。学校の美術教科書にも、多様な美術の例が示されていますから、参考にしてください。

応募方法

下記ウェブサイトから書式等をダウンロードして、応募一編につき、「応募原稿」「応募票」の二点を、1~3のいずれかの方法でお送りください。

- 1 オンライン応募 下記ウェブサイトからインターネットで送る。
- 2 ディスク応募 CD-R等のディスクを郵送等で送る（当日消印有効）。
- 3 手書き応募 手書きした紙の原稿を郵送等で送る（当日消印有効）。

あて先 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術専門学群 高校生アトラライター大賞係

お問い合わせ [芸術支援研究室：直江] TEL 029-853-2821 awa@geijutsu.tsukuba.ac.jp

詳しい応募方法やこれまでの入賞作品等は、ウェブをご覧ください。

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/>

個人情報の取り扱い等

ご提出いただきました個人情報は、本コンテストに関する用途のみに使用します。応募原稿の著作権は、筑波大学芸術専門学群に帰属します。応募原稿を出版物やインターネット等で公開することがあります。

主催 筑波大学芸術専門学群

後援 文部科学省 全国高等学校美術工芸教育研究会

企画 筑波大学芸術支援研究室

第5回高校生アトライター大賞 選考結果

2014年1月 筑波大学芸術専門学群 高校生アトライター大賞選考委員会

応募総数1023編

大賞 (3編、五十音順)

| | | | | |
|-------|---|-----|-------------|----|
| 桑原 ふみ | 境界線を揺るがせ ～「生理マシーン、タカシの場合。」に見るテクノロジーとアートの未来～ | 福岡県 | 福岡県立修猷館高等学校 | 3年 |
| 鈴木 りさ | 命の絵 | 静岡県 | 静岡県立清水南高等学校 | 3年 |
| 朴 秀太 | 目に見えない「根っこ」 | 東京都 | 東京朝鮮中高級学校 | 3年 |

優秀賞 (21編、五十音順)

| | | | | |
|--------|-------------------------------|-----|-----------------|----|
| 石井 日菜 | 壊れて、完成 | 大阪府 | 大阪府立港南造形高等学校 | 3年 |
| 石原 めい | その全ては落書きから始まった | 千葉県 | 千葉県立柏中央高等学校 | 2年 |
| 上田 理紗子 | 隠し絵 | 滋賀県 | 滋賀県立膳所高等学校 | 1年 |
| 大越 梓 | 本の魅力 | 東京都 | 東京都立工芸高等学校 | 2年 |
| 大野 慈 | 私と芸術を繋ぐもの | 群馬県 | 共愛学園高等学校 | 1年 |
| 大元 隆史 | 大空の芸術 | 滋賀県 | 滋賀県立膳所高等学校 | 1年 |
| 皆藤 七海 | 偶然なのか、運命なのか | 栃木県 | 栃木県立宇都宮中央女子高等学校 | 1年 |
| 加藤 利覚 | 藤田嗣治の戦争画 | 京都府 | 京都市立銅駝美術工芸高等学校 | 2年 |
| 金杉 七海 | 青い花 | 東京都 | トキワ松学園高等学校 | 2年 |
| 古賀 瑞季 | 幼い頃の夢 | 熊本県 | 熊本県立第二高等学校 | 3年 |
| 小松 春香 | この瞬間 | 兵庫県 | 須磨学園高等学校 | 1年 |
| 柴田 壮士 | これが月岡 | 広島県 | 広島県立可部高等学校 | 3年 |
| 高浦 実央 | 自画像 | 大阪府 | 大阪府立港南造形高等学校 | 2年 |
| 田中 涼太郎 | 認められる美術と認められない美術 | 福井県 | 福井県立藤島高等学校 | 2年 |
| 塚田 絵美子 | 破壊と再生 | 滋賀県 | 滋賀県立膳所高等学校 | 1年 |
| 富田 楓 | 白は語る | 静岡県 | 浜松学芸高等学校 | 2年 |
| 菱沼 理来 | 私のなかのどんぐり | 東京都 | 光塩女子学院高等科 | 2年 |
| 松本 菜々子 | 私と「無限カノン」 | 愛知県 | 愛知県立岩倉総合高等学校 | 2年 |
| 宮嶋 風花 | 私の私への鑑賞文 | 北海道 | 北海道札幌平岸高等学校 | 3年 |
| 山田 美羽 | 私と「うどんげの花を植える女」 | 愛知県 | 愛知県立岩倉総合高等学校 | 2年 |
| 山本 奏太 | 心に残すメッセージ ～Melting Pointに接して～ | 愛知県 | 愛知県立豊田東高等学校 | 3年 |

学校賞 (7校、五十音順)

愛知県立岩倉総合高等学校 大阪府立港南造形高等学校 熊本県立第二高等学校
滋賀県立膳所高等学校 静岡県立清水南高等学校 須磨学園高等学校 北海道札幌平岸高等学校

選考経過

2013年4月 第5回高校生アトライター大賞募集開始。

2013年10月15日 受け付け終了。応募総数1023編。

2013年10月 第一次選考を行い、100編を選出。

2013年11月 第二次選考を行い、24編を選出。

2013年12月 最終選考会議を開催し、第二次選考通過者から大賞、優秀賞を決定。学校賞を決定。

第一次選考通過者（100編、五十音順）

| | | | | | | | |
|--------|----------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 阿久津 香音 | 内田 直輝 | 金杉 七海 | 近藤 伶美 | 園田 桃子 | 利根川 亜子 | 氷見 哲洋 | 山中 千尋 |
| 浅野 みなほ | 榎本 弥桜 | 上石田 菜穂 | 齊藤 美佑 | 高浦 実央 | 富田 楓 | 平出 真也 | 山本 奏太 |
| 新城 コカリ | 遠藤 今日子 | 川端 夢 | 柴田 壮士 | 高谷 琴美 | 長尾 春香 | 藤川 陽介 | 吉田 圭佑 |
| 安藤 真之介 | 大倉 凜太 | 木下 雄斗 | 坂田 樹 | 竹中 奈々 | 中川 創人 | 藤田 実佑 | 吉田 幸巧 |
| 石井 日菜 | 大越 梓 | 木山 真実 | 坂梨 好香 | 竹原 ゆきみ | 中司 裕理 | 古橋 あすか | 吉田 紗依 |
| 石原 めい | 大元 隆史 | 桑原 ふみ | 櫻井 晴菜 | 橘 彩乃 | 西将 寛 | 堀内 星奈 | 米川 綾乃 |
| 泉山 真悠 | 大和田 遥 | 高 仙花 | 佐々木 彩香 | 立石 夏実 | 法月 園華 | 松岡 竜平 | 劉 宇湖 |
| 稲垣 千奈 | 岡田 萌恵子 | 高 利貴 | 佐田 涼香 | 田中 涼太郎 | 朴 秀太 | 松本 菜々子 | 渡辺 絵理 |
| 井上 七海 | 岡西 夏季 (2 編) | 河野 太郎 | 重森 春花 | 谷口 さくら | 長谷川 葉月 | 宮嶋 風花 | 渡辺 光 |
| 今井 いなほ | | 古賀 瑞季 | 芝田 玖弥 | 谷口 あゆみ | 馬場 茜 | 村松 朋美 | |
| 岩城 健二郎 | 大野 慈 | 小嶋 彩夏 | 渋谷 樹 | 塚田 絵美子 | 林 さこ | 森下 瑞季 | |
| 岩本 華奈 | 皆藤 七海 | 後藤 海帆 | 菅 楓 | 月館 森 | 原口 天志 | 山下 茜 | |
| 上田 理紗子 | 加藤 利寛 | 小松 春香 | 鈴木 りさ | 土屋 恵 | 菱沼 理来 | 山田 美羽 | |

選考基準（第一次・第二次選考）

- 内容面
1. アートに関する自分らしい見方、取り組み方がよくあらわれている。
 2. 対象とするアート活動について、読者に伝わるようによく説明されている。
 3. 読んだ人の関心を呼び起こし、強い印象を与える。
 4. できれば間接的な知識だけより、自分の実体験をもとに述べた方が望ましい。
 5. アートに関する基本的知識に重大な誤りがない。

- 形式面
1. 文章の流れが一貫し、伝えたいことがよくわかる。
 2. 自分の考えと、それを裏付ける具体的な事実の記述との対応がとれている。
 3. 調べた知識や引用と、自分の体験や考えとが明確に区別して書かれている。
 4. 日本語表記に重大な誤りがない。

ただし、形式面より内容面を重視する。

最終選考では上記の基準によらず、各委員による採点結果を集計し、それぞれの観点から議論を行った上で、受賞者を決定する。

第一次選考委員 大学院生：赤木 紗菜 小熊 かつり 川村 晃子 佐藤 絵里子 徐 英杰 平田 実 ボージョー・レーカ 村上 綾
守屋 美晴 薬本 光則 山田 素子 吉田 奈穂子
教員：直江 俊雄

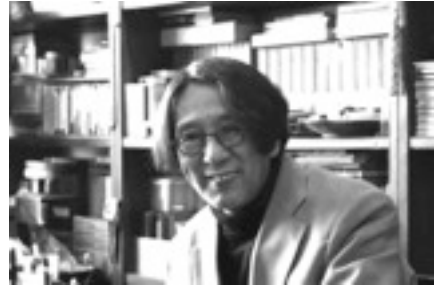
第二次選考委員 学群生：秋葉 菜々美 有須 千夏 井元 景子 大谷 友子 大平 さゆり 岡野 恵未子 琴寄 優莉亜 小松 誠
是永 紫帆 高橋 和佳奈 竹内 緑 橋本 千菜実 三澤 春菜 吉村 南菜
大学院生：赤木 紗菜 池田 三紗 小熊 かつり 川村 晃子 平田 実 村上 綾 守屋 美晴 薬本 光則 山田 素子
吉田 奈穂子
教員：直江 俊雄

最終選考委員 ゲスト選考委員（五十音順）：穴澤 秀隆 奥村 高明 熊倉 純子
教員：守屋 正彦 柴田 良貴 笹本 純 山中 敏正 岡崎 昭夫 齊藤 泰嘉 直江 俊雄

なぜ、美術を言葉で表現するのか

穴澤 秀隆

美術教育雑誌『美育文化』編集担当



「言葉のない世界」を想像できるかい？

言葉なんかおぼえるんじゃないかった／言葉のない世界／意味が意味にならない世界に生きてたら／どんなによかったか／あなたのやさしい眼のなかにある涙／きみの沈黙の舌からおちてくる痛苦／ぼくたちの世界にもし言葉がなかったら／ぼくはただそれを眺めて立ち去るだろう*

どう？ この感覚。な～んか、カッコいいよね。そして、わかるよね、この気持ち。

これは、田村隆一という詩人の『言葉のない世界』という詩集の中の一節だ。田村さんはクールでダンディなおじさんだったから、こういうことが言えたのだけど、ぼくらは何かに感動したとき、まずは、それを言葉にしちゃう。いや、言葉にせずにはいられない。それは感動を人と共有したいせいでもあるが、気持ちを言葉にすることで、まずは自分自身が納得したいためだろう。でもね、これはどんな場合でもそうすべきことなのだろうか。

サザンのよさは説明できない

ぼくはサザンオールスターズのファンだけど、サザンの音楽のどこがいいのかなんて、そうだな、ほとんど考えたことがない。CDをかけながらリズムをとったり、体を揺すったりして、ちょっといい気分になる、それで十分。サザンのよさは説明できない。

では、美術はどうだろう。美術館でいわゆる「名画」と呼ばれる作品を前にしたとき、人はその体験を言葉にしなければ「いけない」のか。そんな必要はないに決まってるさ。美術や音楽は他人がどうであれ、自分いいと思えばそれで十分、何も言う必要はない。ならば美術について文章を書くことなんて意味がない。これでおしまい。

「見る」ことは考えること

いや…、待って。な～んかスッキリしないな。いいの？ ほんとにそれで…。田村さんが空想したように、もしも、ぼくらの世界に言葉がなければ、それでオーケーだろう。

でも、人は言葉をもっている。このため、物事を「無心に見る」ことはありえない。私たちが言葉を所有している以上、言い換えるなら、人間であるかぎり、美術や音楽についておのずと考えてしまう。つまり「見る」ということには、考えることが含まれている。

書くことで傷つくことを恐れるな

だけど、そのときの「考える」というのは、概ね「ぼんやり感じる」ことだという気がする。つまり「考える」というよりは「思う」と言ったほうがいいかもね。そういうときに、思ったことをきっちり書きとめることができたなら、そいつはぐっと深い考えになる。

だけど、本気で書くことは苦しい。なぜって？ それは自分をさらけ出すことになる。さらに、そのために傷つくことがあるかもしれないからだ。でもそれを恐れちゃだめだ。

それぞれの挑戦

桑原ふみさんの『境界線を揺るがせ～「生理マシン、タカシの場合。」に見るテクノロジーとアートの未来～』は、今日の先端的なアートシーンにしなやかな感性で切り込み、しかも的確な批評精神を発揮している。鈴木りささんの『命の絵』は、体験を通じて、自分自身を素直に、そしてあくまでも肯定的に描いたところに好感が持てた。朴秀太さんの『目に見えない「根っこ」』には、まさしく、自分をさらけ出したアイデンティティの探求があり、作品にも迫力があつた。以上の3件は、方法は異なるものの、それぞれ高校生として自己を見つめる卓抜な視点があり、ほぼ審査員全員の合意により大賞となった。

その他、大元隆史さんの『大空の芸術』は、日常の中に独創的な視点を発見しており、上田理紗子さんの『隠し絵』は、「見る」ことの多様な意味を見出している。高浦実央さんの『自画像』は、制作体験に伴う自己との葛藤が正直に書かれていた。山田美羽さんの『私と「うどんげの花を植える女」』は、絵画と詩を往復する思考が巧みな文章力により表現されていた。加藤利覚さんの『藤田嗣治の戦争画』は近代美術がうやむやにしてきた本源的課題に正面から取り組んでいる。この5点は、大賞に次ぐものとして印象に残った。

*田村隆一『言葉のない世界』（196年、昭森社）のうち「帰途」より



芸術～高校生の答え

奥村 高明

聖徳大学教授

芸術とは何だろう。芸術という概念を固定する時代は過ぎさって、その拡張が果てしなく続いている。ある作家は文化や社会に着目し、別の者は人の記憶や生命などについて考える。一人で活動する作家もいれば、コミュニティと協力する人もいる。表現のメディアは多様になり、額縁や塊に留まらない。もう訳が分からなくなってきた。そんな思いを解いてくれたのが、今回のアトライター審査だった。

「目に見えない『根っこ』」

朴は、まず世界を「箱」にたとえ、そこに自己の「もがき」を自覚する。その解決手段として彼は「根っこ＝自分」を掘り出す表現を思いつく。根の出自や形成を問うプロセスを経て、根が単独で成立するものではなく、他者や社会とともにあることに気付く。すると「箱」という喩えも、所詮自分のつくりだした内と外の二元的な実体論に過ぎないことになる。完成した作品は根が箱の壁を突き破っている。それは二元論の否定と、世界を関係性でとらえようとする解決法の提示である。同時に自分を実体化させないまま芸術によって確立しようとする試みの始まりでもある。朴にとって芸術は「私」を明らかにする哲学なのだろう。

「境界線を揺るがせ～『生理マシン、タカシの場合。』に見るテクノロジーとアートの未来～」

桑原は、スプツニ子!の『生理マシン、タカシの場合。』というビデオアートを鑑賞する。女装した男性が生理を体験できる機械を発明するというストーリーである。その内容に彼女は混乱するが、何とか自分の身体や生活体験から答えを見つけ出そうとする。生物と文化の狭間を行き来した結果、人間の「境界線」という概念を見つけ出す。その境界線は進化するテクノロジーによって流動化され、人間という種自体を変化させている。最終的に、桑原がたどり着いたのは、テクノロジーとともに拡張するアートに、人間の境界を揺さぶり再考させる役割があるという事実である。

「命の絵」

鈴木は、奇をてらったことをしない。まず我が身に起きた出来事と感情を素直に受け止める。そこから主題を選び、絵に表す。筆と絵の具を持って、一つ一つの形や色、筆触を自分の気持ちを込めて丹念に描き出していく。その証拠として生まれた作品は、他者に鑑賞されることでささやかな反響を引き起こす。これもまた鈴木は素直に受け止める。その淡々とした事実を最後まで味わったときに、読み手は芸術が人の営みや命の働きから紡ぎ出される行為以外の何物でもないことに気付かされる。芸術は真空状態から生まれるものではなく、天才がつくりだす創造物でもないと改めて思うのである。

大賞の3点が示したのは、芸術が自分という存在の哲学であり、テクノロジーとともに人の境界を再考させる役割をもち、人の営みや命そのものなことだろう。言い換えれば、芸術は人々の日常生活や社会に密接にかかわり、それを先鋭化して現前させてくれる実践ということかもしれない。「高校生にかなわない」。そんな敗北感に似た気持ちを今回のアトライター審査で持った。そして、常に新しい姿を見せる芸術のあり方に鋭敏で、芸術をめぐる議論に薪をくべ続けてくれるに違いない今の高校生に、将来を託したいと思った。

アートの「業」と、鑑賞者へのまなざし

熊倉 純子

東京藝術大学教授



今回の高校生アートライター大賞は、応募数の大幅な増加もあり、入賞作品はいずれも非常にレベルの高い粒ぞろいという印象を受け、なかなか読みごたえがありました。

なかでも思わずうわっ！と唸ってしまったのが、大賞を受賞した朴秀太さんの『目にみえないく根っこ>』です。冒頭から明快かつ小気味よく畳みかけてくるリアリティ、後半の哲学的な思索の研ぎ澄まされた言葉の連続——。まさに高校生離れした力量です。表現とどう向き合うのか、こうした鋭い視座で捉えるには、自分自身と制作が置かれた状況を潔い姿勢で引き受ける力が必要です。朴さんの言葉の力強さは、アーティストに不可欠な才能でもあり、表現者としての将来に大きな期待を抱きました。

もう一人の大賞受賞者である桑原ふみさんの『境界線を揺るがせ〜<生理マシン、タカシの場合。>に見るテクノロジーとアートの未来』には、将来有望なライターの姿がかいま見えます。書き手は、構えない透明な感性で、スプツニ子！の作品の懐に飛び込んで、作品のなかに生きようとする現代の矛盾をとともに実感することに成功しています。簡潔な文章で読者に訴えかける才能はジャーナリストに最適か、あるいは知的な分析力は研究者の可能性もあるのではないか、こちらも未来の活躍が多彩に輝いて見えます。

やはり大賞を受賞した鈴木りささんの『命の絵』は、まず、彼女の絵画作品に目が釘付けになってしまいました。文章に添付された小さな画像でありながら、亡くなられたおじい様の肖像画は、ただならぬ深い気配を放っています。素直な文章は、人生の重たい経験を語りながら、どこか淡々とした抒情を湛え、言葉は高校生らしいのに、どこか大人びた芯を感じさせます。最後の一節で、読者はそれが筆者の画家としての自我なのだ知らされるのです。

大賞の三作は、いずれもアートが抱える「業」のようなものを捉えるのに成功した秀作なのだと思います。

そのほかの入賞作もアートの本質に鋭く迫る作品が多く、言葉の深さと、美術作品への緻密な感性に驚かされました。『私の私への鑑賞文』（宮嶋風花さん）のように、詩的な文章でみずからの内面と作品を語るファンタジックなものもあれば、『破壊と再生』（塚田絵美子さん）や『私と<無限カノン>』（松本菜々子さん）のように、体験を通じた驚きをストレートに描いたヴィヴィッドなもの、さらには、『白は語る』（富田楓さん）や『私と<うどんげの花を植える女>』（山田美羽さん）のような、鋭い批評眼で美術作品との交感における深い境地に到達しているものもあります。入賞作全体に読みごたえがあり、みなさん文章が上手で、まとまりが良い印象を受けました。

また、『隠し絵』（上田理紗子さん）や『心に残すメッセージ〜Melting Pointに接して〜』（山本奏太さん）、『認められる美術と認められない美術』（田中涼太郎さん）など、自身と作品のやりとりにとどまらず、鑑賞者へのまなざしや、美術の社会的価値の在り処を取り上げる作品がいくつか存在し、いずれも独自の視点が明確な力作であったことは、アートマネジメントという、芸術と社会の関係をどのように切り結ぶかを実践的に考える研究に携わる私には、大変嬉しく、頼もしいことでした。

「モノ」へ、思いを込める

柴田 良貴 筑波大学芸術専門学群長 (美術専攻)

「モノ」とは私たちも含めた存在そのものと考えてもらおうと幸いだ。高校生諸君の美術について書かれた文章はどれも着眼した「モノ」が見事だった。

破壊、落書き、隠し絵、本、私、大空、運命、戦争、春、未来、夢、瞬間、月岡、命、自身、認める、再生、白、根、どんぐり、無限、私へ、うどんげの花、心

特に意識して並べたわけではないが、題名の中から独断で「モノ」を取り上げた。どれも「詩」をたたえていて、続けて読むとなぜか心地良い。美術を志すと日常を「常ならぬ目」で見ないといけない。詩人がそうするように「モノ」を深く感じとり、言葉を紡がなければならない。心地良く感じたのは、それぞれが深く考え抜いた文章だからと思われる。

さて、どの作品もさすが千点以上の中から選考されただけあって、読み応えのあるものだ。どれも対象と正面から向き合い、深く入り込み、若者らしい真摯な「視線」が痛いぐらいだ。

大賞の三作品は審査員全員の支持が高かった。修猷館高校の桑原さんは最新のアートシーンを追っている。「再考させるアート」や「最新テクノロジーとアートの融合」は益々これからの美術の表現に大きな比重を占めることを予感させた。清水南高校の鈴木さんは「命」と向き合った絵が良い。絵筆に力が加わって、成長していく「絵」を見せてくれた。朝鮮中高級学校の朴君の作品「根」は、多くの啓示をはらんでいて、何より文章ともどもその「力強さ」に引きつけられた。他に個人的には、膳所高校の上田さんの「隠し絵」や同じく膳所高校の大元君の「大空の芸術」が印象に残っている。

以上

選考所感

笹本 純 筑波大学教授 (構成専攻)

前回に引き続き、2度目の選考委員をさせてもらいました。今回は応募数も格段に増え、充実したアトライター大賞となった様です。私は、グラフィックデザイン、絵本、マンガといった方面を専門とする者ですが、アート全般について強い関心を持ち、その意義効能について心から信じています。この催しの活発化は、自分の仲間が若い世代の中に増えていることを示すわけで、とても嬉しいです。

この度も、高校生の初々しい感性、真摯な思考が生み出した作物に触れ、そこに明らかに反映されているアートや社会の現代的状況といったものに思いをいたすことになりました。大変に刺激的な体験でした。若さ故の文章表現の未熟さや視野の広がり不足、行き過ぎた気負いなども目に付きましたが、そうした点を忘れさせる様な、新鮮なパワーを孕む優れた作品が多かったです。

以下、上位入賞作を中心に印象に残ったものの感想を記します。

『境界線を揺るがせ～「生理マシン、タカシの場合。」に見るテクノロジーとアートの未来～』は、最も先進的な新しい表現者の仕事に積極的に関わろうという姿勢が際立っていました。通常の「教育的」環境に安住せず、時代の前衛を見つけ出し肯定的にフォローしていくのは、若い人の特権、乃至は義務です。この作品にはそれが端的に現れていました。

『命の絵』は、自分の病気や祖父を亡くす経験の中で描いた絵の制作過程のレポートです。親しみやすい素直な文章で、人との関わりや状況の推移、自分の心の時々の有り様といったものが的確に表現されています。図版として挿入されたおじいさんの肖像画も素晴らしい。

『目に見えない「根っこ」』は、「自分探し」と重ねる表現として、木の根を掘り起こしそれを提示する行為を実施した活動の記録です。実物の根っこを掘る行為をもって出自の探求に置き換えることの妥当性を問うことも出来ます。しかし、そうした方法しか選べない状況の理不尽さに耐える強靱な精神にこそ注目すべきでしょう。ここで述べられた、身体を介した創作営為の過程で新たな認識を得るといった経緯は、アートの本質に連なる事態だと思います。

他に『隠し絵』や『私のなかのどんぐり』に惹かれました。双方とも、皆に共有されるものとしてのアート作品という観点を導いていて、共感できました。

見えるものから見えないことを－感性は、表現と感覚の間を繋ぐ心の働き－

山中敏正 筑波大学教授（デザイン専攻）

今年も全国の高校生から自らの制作体験、作品探求、芸術支援をテーマとして 自分の言葉で考え、伝える力を育むという主旨にふさわしいエッセイが、全国から集まった。制作体験での自らの表現に対する真摯な問いかけ・もがき・苦しみ、作品探求においては、作品に込めた作者の気持ち、悩み、主張などを自分なりの立場で読み解こうという若々しい試みが表現されていた。芸術支援はやや抽象的・一般的な視点が要求されるジャンルながら、若々しい問題提起を行い評論したエッセイに出会うことができた。

美術とは何か、美術を評価するということはどういうことかという事について切り込んだ「認められる美術と認められない美術」。美術教育と作品評価という美術を取り巻くシステムに対する疑問が投げかけられている。あまりにも難しい問いかけであり、専門家ですら欺瞞を含まない答えを見出すのは難しいだろう。そんな問いを素直に文章にしてしまったところは一種すがすがしいが、さすがに事が大きすぎて結論は見出せない。しかし、これは永遠の課題であり芸術の枠組みに関わることなのだ、心に持ち続けてもらいたい。

「青い花」では、大人になる、年相応の表現をするということについて興味深い考察がなされている。子どもの時の自分の考え方は時が経つと自分ですら思い出せなくなる。むしろ、その時には「考えて」いなかったということに気づく。結局、考える、すなわち「理屈を与える」ことが「おとなの表現」に他ならないと知る。実は誰もが「言われれば知っていると思う」現実であり、この事を書いただけではエッセイとしての魅力は小さいのかもしれない。しかしながら、芸術に関わる者として自らこの問いかけを行うことはとても大事だということを作者は忘れずに生きていこう。

「本の魅力」は、作者とは誰なのか、という問いかけをしてくる。我々が感動する対象物を作ったのは一体だれなのか。デザイナーは「デザインはサイエンスにかなわない」といった思いを持つ時がある。しかし「サイエンスを美しくするのはデザインである」ということもまた事実である。つまり、美しさというのはそれに気づいた人の創造力の表現だということがわかる。そうした芸術表現の面白さを書き表してくれている。

芸術と表現は切り離せない。しかし芸術の感性は、見えるものと見えないことの間をどれだけつなげたかという行為の所産である。表現と感覚の間を繋ぐ心の働き、それを感性と呼ぶのだが、そういう意味で、芸術を表現することと芸術を考えることは両方とも重要な感性の働きの成果だろう。どうやったら良い作品を描けるのだろうか、自分はどうやってこの作品に感動したのだろうか。美術とは何なのだろうか。いずれも美術に関わる者たちにとっては一生抱えて生きていく大事な問いかけである。そうした問いかけに対して瑞々しい感性で綴られたエッセイを読むことは、それ自体が芸術との対話、すなわち感性の働きなのだ。

過去・現在・近未来

岡崎 昭夫 筑波大学教授（芸術学専攻）

最終選考の24点は、いずれも自ら設定した課題に対する興味と関心が現れていて、果敢に取り組む熱意が行間にあふれだし、読み応えのあるものばかりでした。その中でも母子が絵の中に隠された動物を探す対話から作品の意味を悟った『隠し絵』、絵の臨場感に自分なりの美しさを理解した『藤田嗣治の戦争画』、小学生の時の自己の絵に解釈ではなく感動という重要な要素を見出した『青い花』、美術作品の等価性を論じた『認められる美術と認められない美術』、物を崩してアート作品にしたことの素晴らしさを報告した『破壊と再生』、芸術祭で作品ガイドとして鑑賞支援に取り組んだ『心に残すメッセージ』は、3点の大賞受賞作と共に、注目した作品です。

大賞受賞作の『命の絵』は、十代の作者とその祖父とが同時期に被った病についての物語です。意のままにならない「生老病死」の四苦を受け入れる時が誰しも来るのは必然ですが、その時を免れた作者は祖父のその時に対してもう一つの苦しみの「愛別離苦」に落ち込みます。その時の前に作者が描いた祖父の肖像とその後に描いた祖父の手に包まれる作者の自画像に「祖父に対する確固たる尊敬や愛する気持ち」が「命を与えてくれた」ことで、「別離」ばかりか「生」の苦しみを作者は超えることができました。作品の表面にある色と形の背後には作者をとりまく人々の過ぎ去る物語があるのです。

『目に見えない「根っこ」』では表現が「生」きる糧となった作者の作品に関するコンセプトが記述されています。「自分の内面を広い世界に映し」出す装置は、学校の体育館脇から掘り出した木の根をパネルのケース（縦155×横120×奥行き45cm）に入れたもので、その根に複雑に絡みついていた隣の木の根の一部がケースの上部左側の穴から外に出ています。独自の存在と過信していた大きな根の中にあつた他の木の根は過去の長い時の経過で現在は不可分となっていました。作者はそこに二つの文化的基盤に葛藤する「自分の中に存在する『内なる他者』」に気づきます。作品はそのケースの上に観客が座ることで完成しますが、そうした「生き生きとした広がりやあつみを発現する構造」は現在の「身体性」や「場所性」（李禹煥『出会いを求めて』田畑書店1974年）を強調します。こうして作者は観客に目には見えないそれぞれのルーツを意識させる芸術の装置を作り出したのです。

『境界線を揺るがせ』は現代の芸術家の「スプツニ子！」が考案した装置（「生理マシーン、タカシの場合。」）に関する論評です。これは女性の生理を疑似体験させる機械を作って男性に身につけさせるというコンセプトで作られたもので、「テクノロジーでジェンダー（性別）を超越する」のがテーマとなり、「問題を提案して議論を活性化させる」ような「クリティカル（社会批評的）・デザイン」で人々の発想を変革し、アートで世界を動かすことを目指しています（「フロントランナー」朝日新聞2014.1.4, b1, b3面）。こうしたアートを映像で見た作者は、「突然投げかけられた質問」を受け止めて、「刺激的に境界線を揺さぶり、私たちに再考させるアートの役割」を見出すのです。私たちは、最新のテクノロジーとアートが融合した「マシーン」によって、近未来に関する問題を提起して議論を活性化することができるのです。

読者は大賞作品を読むことで、芸術を通して過去の様々の出来事を想起し、現在の社会的状況や文化的基盤を考え、近未来社会を構想することができるでしょう。

反芸術的アートライティング

齊藤 泰嘉 筑波大学教授（芸術学専攻）

「芸術」とは何か？漢和辞典によれば、「芸術」の「芸」は、もともと大地に緑（草花や木）を植える意味だという。したがって、「芸術」とは「園芸術」、今風の言葉で言えば、「ガーデニング」ということになる。旧字体の「藝」という字を虫眼鏡で覗いてみよう。草かんむりの下、しゃがんで苗木を植えている人の姿が見えるはずだ。では、「美」はどうか。この字は上下二つの字から出来ているという。上は「羊」、下は「大」である。羊が太って大きいほど立派で美しいというわけだ。以上をまとめると、芸術は生きた植物と関係があり、美は生きた動物と関係があるということになる。美であれ、芸術であれ、両者は「生命」あるいは「生命感」と深く関わっているのだ。

では、今回の応募作にはどのような美と芸術が表現されているだろうか。応募総数約1,000編の中から最終選考に残った24編のみを読ませてもらった感想だが、これまでになく、「反芸術」とでも呼ぶべき表現活動に注目した文章に優れたものがあったように思う。創造ではなく破壊、生命ではなく死、充足ではなく喪失、共感ではなく孤立、多くの人間が無意識に排除したがる方向にあえて進んでのライティングに秀作があった。例えば、石井日菜「壊れて、完成」は、キャンバスを棒で叩き壊すという破壊作業の果てに画面中央に大穴が空いてぼろぼろとなってしまった自作を完成とするという「反芸術」、「反創造」が主題だが、逆説的に「芸術」や「生命」を感じさせ、表現行為の実相がよく描けている。鈴木りさ「命の絵」は、「良い絵が描ける自信がない。何か、私の絵って、薄い」という告白から始まり、祖父の死や自分の手術という試練の中で絵を制作した際の自分の成長について書いている。祖父の肖像画は、芸術志望の自分の味方になってくれた祖父への「恩返し」であり、祖父の手に包まれた泣き顔の自分の絵は、他界した祖父への「気持ちを整理する」ための絵である。ここでの絵画制作は、自分の気持ちの表現のための手段となっている。自作に対する評価の喪失や自分の孤立をあえて選んででも、自己告白の純粹さを優先した「反芸術」的執着に共感を覚える。朴秀太「目に見えない『根っこ』」は、今回のみならず、過去の応募作品を振り返ってみても、最も優れたライティングの一つと感じた。さきほど、芸術は緑を「植える」とこと書いたが、在日朝鮮人の朴秀太は、それとは逆に、自分より大きな木の根っこを体育館そばで2週間かけて「掘り起こす」ところから作品作りを始める。大空という未来へ向かって草花や苗木を植えるのではなく、自分のルーツを考え、地中という過去へ向かって根を掘り続けたのだ。この「自分探し」の行為が芸術なのか、創造なのかは不明である。この2週間の発掘作業のときの心情はどうだったのか、書いてほしかった気もする。以上、3作の感想を思いつくままに述べさせていただいた。

「反芸術」は、芸術とは何かを問いかける芸術であるとあらためて思う。

999編にありがとう

直江 俊雄 筑波大学准教授（芸術学専攻）

第5回の今回は、前回の応募数の2倍を上回る1023編もの作品が集まりました。コンテストとしては、応募数171編で出された第1回と同じ24名の入賞者枠しか設定しておらず、結果的に999編もの作品が選外となってしまいました。賞に選ばれた以外にも、とてもユニークな視点をもった素晴らしい作品が数多くあることを知っているのですが、表彰という形ではその努力を取り上げることができず、とても申しわけなく思っています。

これだけ数多くの優れた文章がひしめく中で、なぜある作品は賞に残ってそれ以外は認められないのか。選ばれなかった皆さんの中にはそんな悔しい思いを抱く人がいるかも知れません。選考委員の採点結果を集めると、なぜか多数からの支持を得て上位に残る作品があり、あらためて、多くの人々の心を打つ何かがあることを、私たちが再発見するのです。一方で、表彰されなかった999編にも、それぞれの執筆者のかけがえのない体験や考えを表現しようとする、貴重な取り組みが綴られています。私はこうした努力をいつかどこかで評価することはできないか、考え続けていきたいと思っています。999編のエッセイを送ってくれた皆さんに、私は心からの敬意と感謝を送ります。

さて、惜しくも大賞に選ばれなかった優秀賞作品の中で、私のお気に入り、ここで思い切り称賛しておきたいと思えます。展示会での経験を綴った文章には、作品を見て受けた心の動きを述べるものが多くありますが、上田さんの「隠し絵」は、展示室で出会った他の鑑賞者の行動によって変化していく自分の気持ちを描き出しているところが、とても独創的です。しかもその独創性は、展示室での、とてもありふれた情景、私たちが似たようなことを経験しても大して気にも留めずに過ごしてしまうようなできごと、鋭敏な感覚を向けることから出発しています。「アートと人々の交流」について私たちの目に浮かぶように描き出してくれたこの作品は、作品探究部門への応募ではあるのですが、芸術支援部門の精神をも十分に表した例として、私は高く評価しています。

それから、愛知県立岩倉総合高等学校から送られてきた「私と『～』」シリーズの作品探究エッセイが私は大好きです。優秀賞に選ばれたのは松本さんの「私と『無限カノン』」、山田さんの「私と『うどんげの花を植える女』」ですが、そのほかにも印象的なものもいくつかありました。美術作品の取り上げ方にその人独自の体験が反映されており、読んだ私たちが展示室に立って、筆者と一緒に歩きながら思いを巡らせているかのように感じさせてくれます。等身大でゆったりとした歩幅をもつこれらの文章は、美術に触れた体験を静かに輝かせてくれる宝物のような魅力をもっていると思います。

大賞

境界線を揺るがせ

～「生理マシン、タカシの場合。」に見るテクノロジーとアートの未来～

桑原 ふみ 福岡県立修猷館高等学校 3年

画面に映し出される怪しげな機械。チューブを流れる液体は、赤黒い。カメラは一人の中性的な青年を映す。スーツを脱ぎ、化粧をして、カツラを被り、女性へと変身していく彼。テクノポップのような音楽が鳴っている。そして最後に彼が腰に身につけたのは、先程の怪しげな機械。不自然に金属が体に纏わり付いた様は、まるで腰だけサイボーグになってしまったようだ。夜の街に出かけた彼は、突然路上で腹を抱えてうずくまる。トイレで苦しみながらも恍惚とした表情の彼。便器の中を赤黒い血がゆらゆらりと妖しげに漂う。「知りたいでしょ…」音楽がそう囁いたところで、ビデオは終わる。

ビデオを見終えた私の頭には、何かを打ちつけられたようにガンガンとした鈍い痛みが満ちていた。頭に残るサウンドと、血の残像。女の私にとっては当たり前である生理。むしろ疎ましく思う時もある。それを彼は欲し、身に纏った。なぜ。そもそも、生理って何だ。私にとってどんな意味を持つ。突然投げかけられた質問に、私の頭は追いつかなかった。私が見たのは、スプツニ子!の「生理マシン、タカシの場合。」という映像インスタレーションだ。概略すると、女装癖のあるタカシ君が女性への変身願望から、生理を体験できる機械を発明してしまったというストーリーだ。この生理マシンは偽物などではなく、実際に最新のテクノロジーを駆使して製作された。腹部に電極を貼付することで生理独特の鈍い痛みを生み出すらしい。ビデオはYouTubeに投稿され大反響を呼び、翌年にはMoMAで展示された。彼女は「様々なテクノロジーが発展した2010年になってもまだ女性が生理で血を流しているのを不思議に思った。」と言う。私達は生理を疎ましく思うこともあるが、避妊用ピルでそれをなくすことはしない。実際身体的影響もあるのだから無理はない。でももし何の害もなく生理をなくす方法ができれば、鈍い痛みとも、面倒と

もおさらば。妊娠に関わる時だけ使わなければいい。最高じゃないか。…それでも、私達は血を流すことを選ぶだろう。なぜか。そこには、私達の倫理観が許容する限界＝「境界線」があるからだ。そこは踏み入ってはいけないという、境界線。生理マシンという思いもよらないアプローチで私達の倫理的境界線、また、性的境界線をも揺さぶってくるこの作品は、混乱する私達に挑発的に問いかける。ねえ、キミはどう思う…と。

私達は進化するテクノロジーに対しある境界線を定め、それを超えるか超えないかを受容する際の基準としてきた。しかしいつの時代も、テクノロジーは境界線を越えていく。例えば18世紀にジェンナーが牛痘法を開発した当初、「牛の膿を注射するなんて!」と大論争を呼んだ。注射された人々の腕や顔から牛頭がキノコのように生えた様子を描く当時の風刺画からも、人間の倫理観を越えたものに対する嫌悪感、不信心、不安感が見てとれる。私達は境界線を補正していくことで、テクノロジーを受容してきた。これはきっと私達の命を救ってくれる、生活を豊かにしてくれる…という希望を抱いて。そして現代。テクノロジーは新たな局面を迎えている。出生前診断、デザイナーベイビーに見られるように「命をデザインする」時代へと転換しつつある。心臓移植なども十分大きな論争を呼んだが、それとは全く違う。言わば「創造主の領域」に踏み込もうとしているのだ。近い将来実際にそれらと向き合った時、私達はどこまで許容できるのか。境界線はどう動くのか。考えれば考えるほど頭を抱えてしまう。だからこそ、この作品のように刺激的に境界線を揺さぶり、私達に再考させるアートの役割が更に重要になることは間違いないだろう。また一方、この作品には「こんなのどう。すごく面白そう。」という突き抜けた遊び心も感じられる。実用性は極めて低いのに、最新技術を駆使して作られた生理マシン。彼女は他にもハーバード

大などと共同製作したカラスのロボットを使った作品「カラスポットジュニー」を発表している。近年このように超一流の研究機関がテクノロジーと芸術の融合に取り組む動きが活発だ。彼女自身も今秋からMITメディアラボの助教に着任する。彼らを突き動かしているのは、純粋な好奇心と遊び心。好奇心と遊び心に溢れた研究者と、常に革新を求めるアート。両者が出会った時に生まれる作品は、無限の可能性を秘めている。

日本ではテクノロジー＝実用化を目指した最新技術、というイメージが拭えない。しかし、もっと柔軟に考えてみてはどうだろうか。最新テクノロジーとアートの融合。身震いするほど面白そうではないか。しかもそれらは境界線を揺るがし、問いかけ、大きな論争を伴って私達をかき乱すのだ。不謹慎かもしれないが、私はそんな作品達に会える瞬間が待ち遠しくて堪らない。「生理マシン、タカシの場合。」は、そんな未来を予言しているのかもしれない。

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)

「生理マシン、タカシの場合。」2010年

《参考サイト》

スプツニ子!ホームページ

(<http://sputniko.com/>、10月1日アクセス)

スプツニ子! work 「生理マシン、タカシの場合。」

(<http://sputniko.com/?p=91600>、10月1日アクセス)

《参考画像》

スプツニ子! work 「生理マシン、タカシの場合。」

<http://sputniko.com/?p=91600> より

大賞 命の絵

鈴木りさ 静岡県立清水南高等学校 3年



図1

良い絵が描ける自信がない。何か、私の絵って、薄い。人の心にはたらかせるような考えとか、技術とか、何もない。何かを伝えようという絵が描けない。それって、致命的じゃないかな。本当苦しい。

約二年前の日記の内容だ。当時の私は、実際に自分で何かを感じたり得たりするような体験をしたことがなかった。だから、絵で人に何かを伝えることなど、私にはできないのではないかと思っていた。

約一年半前、私の母方の祖父に胃がんが見つかった。時期を同じくして、私自身にも大きな病気が見つかった。今では完治したのでこうして書けるが、その時は世界の終りのような気分で、毎日泣いてばかりいた。それでも幸い絵が描けなくなるような病気ではなかったし、私には夢も希望もやりたいこともやるべきこともたくさんあるのだから、死んでやるものか、と思っていた。手術の前日、ちょうど日が落ちる頃、病院の窓から空と溶け合うような富士山を見た。淡い色がとてもきれいで、何時間でも見ていられる気がした。命にかかわる大きな手術を前にしているにもかかわらず、そんなことを思った。その時私は気付いた。どんな時であっても、美しいものは美しいのだ。

手術は無事終わったが、後遺症もあり、不安はぬぐえなかった。しかし、美しいものは美しい。この言葉があれば大丈夫だという気がした。早く絵が描きたかった。退院して学校に復帰し、順調に

絵を描いていった。しかしその間も祖父の病気は悪くなっていった。それまで私は、死というものを身近に感じたことがなかった。私の大好きなおじいちゃんやおばあちゃんも、きっと私が大人になるまで元気で生きているのだと思い込んでいた。しかし、それは違った。人は、いつ死ぬかわからない。私は夏休みの課題に祖父の絵を描くことを決めた。(図1)

祖父は、美術をやっていきたいという私の夢を全力で応援してくれた。いつでも私の絵が一番だとほめてくれた。そんな祖父に、絵で恩返しをしたいと思った。私は夢中になって描いた。祖父の姿を永遠に一枚のキャンバスにとどめておこう。そんな気持ちだった。完成を前にして、祖父は夏の暑さに耐えきれず緊急入院してしまった。急いで絵を完成させ、病院にいる祖父に見せに行った。元気だったころからは想像もできないほど衰弱していたが、とてもうまい、とほめてくれた。学校で完成した作品を見せると、たくさんの人がほめてくれた。私は祖父がほめられているようで誇らしかった。しかし完成の二週間後、祖父は亡くなってしまった。絵を見せたあの日が祖父と話した最後になった。

祖父のお葬式には何百人という方がいらっしやって下さり、私のおじいちゃんは本当にたくさんのひとに愛されていたのだ、とまた誇らしくなった。祖父は、とても立派な人だった。そして、皆に愛される素敵な大人だった。私は祖父に誓った。きっと私も祖父のような人になると。その日から、私の夢は祖父のような立派で素敵な大人になることになった。そして、ちょうど静岡県中部美術工芸展にS50号の大作を出すことになり、もう一枚、祖父のために絵を描こうと決めた。(図2)

夏休みの絵を描いているとき、祖父の手はとても素敵だということに気付いた。祖父は木材店に勤める職人だったので、祖父の手は節々がごつごつしていて、力強くて、とても素敵だった。

絵の中の大きな手は、そんな温かく力強い手に包まれている様子を表現している。中心にいるのは自分だ。表情は悲しいけれど、これからもこの温かい手に包まれているから大丈夫。私は頑張れる。そういう感情を表現した。(図3)結果は



図2

あまり良いものではなかったし、人からはもっと写実的に描くべきだった、表現が直接的すぎる、といったようなことも言われたが、評価が高なくても写実的に描かなかったことを全く後悔はしていない。この絵は背景や祖父の手、自画像すべてが私の心象風景だからだ。感じたこと、表現したいものをそのまま表現したものだ。何より、この絵は祖父に向けて安心してもらうため、そして祖父に対する私の気持ちを整理するために描いたものだった。見る人のことをないがしろにしたつもりはないし、一番の目的は果たした。実際、私はこの絵が大好きだ。初めて、借り物ではない自分の想いを絵に込められた。祖父のおかげで私はとてもいい絵が描けた。祖父に対する確固たる尊敬と愛する気持ちが、私の絵に命を与えてくれた。

病気をして、祖父が亡くなって、はた目から見たら不幸に見えるかもしれないが、私はこういうことがあって良かったとさえ思っている。大多数の人が経験できないことを今この時期に経験できた。後悔や悲しみはあるが、そのおかげで強い意志と、自分という人間の芯の部分が出てきたと言える。母がかけてくれた言葉で、こんなものがある。「苦しい事を体験した人ほど、素敵な人になれるよ」。本当にその通りだと思った。

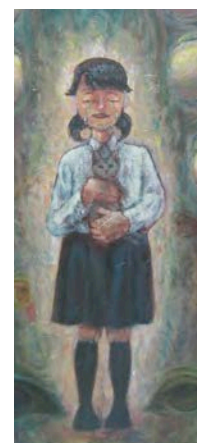


図3

大賞

目に見えない「根っこ」

朴 秀太 東京朝鮮中高級学校 3年

私は在日朝鮮人だ。そして高校生だ。社会や学校という「箱」の世界で、私の毎日は息苦しいものだった。その思いが私を表現に向かわせる。私にとっての表現とは、提案することであり、願い立てることであり、勝どきの声をあげることであり、号泣することでもあった。私にとって表現は自分が生きていくためのかけがえのない糧になった。

私の生きる意志はとりわけ美術部での活動に現れた。実際、私は自身を発信すること、自身の思いに形を与えることに飢えていたように思う。作品を制作し、展示し、それが評価されるたびに、自分の内面が広い世界に映し出されていくように思えるのだ。

そんな私にとって作品を制作することはいわゆる「自分探し」でもあった。自分を表現し、発信することで、ルーツを模索し、世界との関係を探り当てたいと思っていた。

私は一人、ひたすら何かを表現しようともがき続けた。

ルーツ。



そうだ、あの体育館脇の木の根を掘り起こそう。

2週間、私はたった一人、学校にあった自分よりはるかに大きく長い根を掘り起こした。

私の根っこがどこにあるのか見えるような気がしたのだ。

私は掘り起こした根をケースに入れた。そして観客一人一人にケースの上に座ってもらうことで作品の完成とすることにした。

私はディアスポラにも似た存在だ。日本にまき散らされた外来植物の種のようなものだ。

そんな植物にも根がある。「根無し草」という言葉があるが、私にも私だけの根があるのだ。足元で生きる根がそれだ。

私は思う。人の根は必ずしも一つでは

ない。私は生まれた地である日本に根を持つ。だからといって自分の中の朝鮮の根が枯れたとも思わない。そしてそれらの根っこの上、茎となり、葉となり、実となり、木となるその部分は他でもない「私」である。

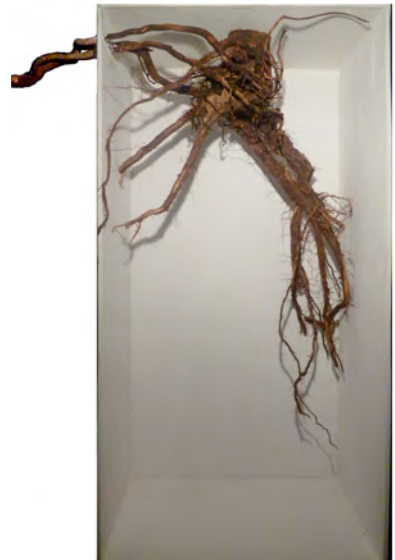
私が掘り起こした根っこには、隣の木の根っこが絡み付いていた。それでもその木は昂然と立ち続けていて、まるで根を見失っていた私に対するメッセージのようだ。そう、私の根っこは他者の根と絡み合っている。私の根には複雑に、無数に他者の根っこが絡み付いている。それは私が生まれる前から存在し、私以外の話者とも共有され、私のうちに宿った朝鮮語と日本語という二つの言語かもしれないし、それらの言語がもたらす内なる世界観かもしれない。

根に自分の中に存在する「内なる他者」に気付かされたとき、私の表現は箱の外だけに向けられたものではなくなっていた。

しかし一方でソリスト気取りの振る舞いのせいで、箱の中で私は立場を失い、彼らとの間には大きな溝が出来ている。私が作った溝だ。言い換えれば私の行為と存在が溝によって認識されていたのだ。集団に依存せず孤立すること。どこか面映ゆく、寂しくも思っていた。とはいえ、私はその溝を隔てた向こう側にも自分の存在が繋がっていることを知ってしまった以上、個性を探し求めながら、集団への埋没をも強いられた。

思えばそれまで私が行った「表現」には、集団の中で孤立しながらも自分を確立しなければならぬという強迫観念があった。けれども強迫観念が何だというのだ。私の「表現」を私以外のものが律してよいわけがない。そう考えていた。しかし、もはやソリストではいられなくなったのだ。「内なる他者」に向けた表現が私に求められた。

私は画家として、彫刻家として、作曲家として、劇作家として作品を創造してきた。自分のしたいことを、カントを気取って「自律的」に行ってきたつもりだった。その表現が自分の立場をなくし、自分自身を孤独という溝の内側に追いやった。それが「自立」だと錯覚した。けれどもそうではないと気付いたとき、表現はいつしか、自分を確認するために自分を発信する行為であると同時に、他者と世界を知るための手段となった。表現がこの世のすべてから自由であることな



「根」 2013年
縦1550×横1200×奥行450
生木、コンクリートパネル、映像

どあり得るだろうか。もし私の表現が何物にも束縛されず、無限の自由を許されるならば、それは何の意味も持ち得なくなるのではないだろうか。それは虚無のトートロジーとしての表現に過ぎないのではないだろうか。

私は誰でもない。周囲とは絶対に相容れないと思いつく、浮いた存在。しかし私の中に「他者」はいる。だからこそ探求し続けたい。自分の根を知り、他者を知り、私の存在を探し求めたい。そうして私は私を確立させ続ける。

出会ったことのない人に出会う。見たことのない景色を見る。知らなかった知に触れる。そうして新しい自分を見つける。私は最初、箱の中に居場所はなく、箱の外に居場所があると思いつく、箱の外に媚びようと必死だった。しかし逃れるための手段である表現が、私を「根」に気付かせたのだ。そう気付いたとき、私には箱の「外」も「中」もなくなっていた。

だからこそ表現者として奇妙にも見える「自分探し」をしていきたいという思いをあらためて固める。

私は、これからも、「根」のある表現者として生きていく。



優秀賞

壊れて、完成

石井 日菜 大阪府立港南造形高等学校 3年

私は抽象画を描く。本来ならば美術学校に進学してそういう道に進みたかったが、家の家計がとても厳しい状態で結局進学はできなかった。やりたくもない就職活動をさせられ、本当に苦痛だった。何度も進学したいと訴えかけたが、結果的には何も出来ずに終わってしまった。日に日にストレスが溜まり、アルバイトもやっていたので心身ともかなり疲労していた。溜まりに溜まった物が爆発しそうな時に私はそのすべてをキャンパスにぶつけていた。

私のやり方はかなり特殊で、まず同じやり方をしようとする人は私の周りでは少なくともいない。ナイフで切ったりガスバーナーで燃やしたり、やり方は様々だ。こんな危険なやり方をしているのだからもちろんやる前に先生には許可を得ているし、周りへの配慮も忘れていないつもりだ。

そして夏休みの時、アルバイトは多くなってしまったが、就職活動はやらずに済んでいたので時間があるときは自分の作品を作っていた。もう就職してしまったら自分らしい抽象画なんてアトリエがない限り描けやしないと思ったからだ。その時に描いた作品もかなり特殊で、自分でもやったことのない新しいやり方だった。キャンパスを棒で叩き壊して、釘で修復するというものだった。

本当になにもかもから逃げ出したい、でも逃げられない状態でかなり精神的に追い詰められていた。そんなときに私は近くにあった棒を拾い、それでキャンパスを叩き壊した。「精神崩壊」のイメージにしたいくて、キャンパスの木片がぼろぼろに砕け散ってあっちこっちに飛び、正直もう使い物にならない部分もあった。それでも骨組みしか残らないくらいに壊した。後のことなど全く考えもせず。

終わった後はただ呆然と立っているだけだった。でもこれで完成、という感じがしなかった。だから今度は「精神回復」のイメージで砕けたキャンパスをもう一度釘で修復し始めた。自分なりに出来上がっていく作品に満足していたが、一方でいつ完成するのかという不安もあった。

私の抽象画は終わりが見えないことが多く、後で思い返せば未完成だったなどという作品がかなりある。私はその日の感情だけで作品を作っていくのでテーマが決まらず、いつもぐだぐだになってしまう。テーマをああしたい、こうしたいと考えたことはあるが、結局感情に流された作品になり、結果未完成もどきになってしまう。この作品は唯一テーマが定まっています、こうしよう、ああしようと既に決まっています今までの作品の中で一番スムーズに作業が出来ていたかもしれない。

そんなある日、後輩が制作をしている私に向かって「先輩、釘を打つ音がうるさいので静かにしてくれませんか」と言った。この時、後輩は高校展に向けての制作をしてもうすぐ締め切りの日が近づいていた。確かに思いっきり釘を打っていたので音はかなり大きかったと思う。だが軽くとんとん金槌を叩くだけではなかなかキャンパスに釘が入らないので思いっきり叩く以外では何も出来なかったのだ。そのときは苛立った。じゃあどうすればいいんだと、他に何か別の方法があるのかと聞いてやろうかと思ったが、自分はただやりたいから来ている、この子は賞をとるために必死で頑張っているここに来ているという言葉が頭をよぎり、その日は片付けて作業を終わらせた。

しかし、次の日が来ても、またその次の日が来ても、「釘を打つ音がうるさ

い」という言葉が脳裏から離れず、キャンパスの前で呆然としているだけだった。

後日、後輩の作品が高校展に展示されていたが、残念ながら私が見たときは賞をもらえていないようだった。もしかして自分の金槌の音が原因で集中できなくて結果こうなってしまったのかと考えると胸がもやもやして頭が痛いような感覚がした。



そしてついにその作品を作ることをやめ、完成とした。「精神」は完全に治ることがなく、真ん中には穴が開いたままのぼろぼろのままになってしまった。時々、あの時あの一言を言われなければ自分の作品はどのような形になっていたのかと。でも今思えばこれでよかったと思っている。後輩のたった一言がきっかけで制作意欲をなくしてしまったのだからこれはある意味「精神崩壊」なのかもしれない。また自分の中の制作意欲が元に戻ったのならば「精神回復」を始めようと思う。

・・・来た。

「何描いてるの？」

そう言って、クラスメイトが私の手元を覗き込んだ。私は慌ててそこを手で覆い隠し

「何も描いてないよ」

とだけ小さく返した。落書きをしていたのを見破られ、彼女は興味深そうに見せて見せると言い寄ってくる。しかしそれでも私は頑なに首を振り、決して紙から手を離そうとはしなかった。描いた絵を見られるということが、なんとなく自分だけの世界に土足で踏み入られているような気がして嫌だったからだ。

私は人付き合いが苦手である。自分から誰かに話しかける時は勿論、人から話しかけられた時も緊張で体が強張ってしまう。加えて私は、何を書いているのか尋ねられるのが嫌いだった。私にとって絵というのは描きたいものを考えてから描くものではなく、無心で描いているうちに本当に描きたいものが見つかる、といったものだったからだ。何を描いているのかを訊かれ、例えばそこに何か描いてあったとしても、私からすればそれは完成しない限り「絵」ではなく、「絵」という名前がついているだけの線や円などを組み合わせた暗号のようなものでしかなかったのだ。しかし一口に人付き合いが苦手と言っても、人が嫌いな訳ではなく、むしろ、もっと色々な考えを持っている人と話がしてみたいと思っていた。この時点で矛盾が生じている訳だが、私一人ではどうすることも出来ず、結局いつものように隠しながら落書きをする日々が続いた。今思い返せば単純な話で、あんなに必死に隠していたから逆に周囲の目を引いてしまったのだろう。

そんな引っ込み思案な私に人とのつながりを教えてくれたものこそ、他でもない絵だったのである。

小学生時代のある日、私はいつものように机からひっそりと紙とペンを取り出して、創作活動という名の「自分の世界」に入り浸っていた。しかしその時私は体勢が前のめりになってしまうくらい夢中になっていたため、背後から私の絵をずっと見ていた子がいたことに気が付かなかった。気付いた時にはもう遅かった。しまったと思ったが、焦る私とは裏腹に、その子は不思議そうに

「すごい上手なのに、何で隠しちゃうの？」

と聞いてきたのだった。何と答えようか悩んでいるうちに、一連のやり取りを見ていた人達が集まってきて いつの間にか私の周りには人でいっぱいになった。皆が私の描いた絵を見て称えてくれ、そして笑顔になっていた。

その時私は気付いた。絵を描くことで自分は人とのつながりを得るのだ、と。言葉で自己を表現するのが難しくても、私の描いた絵に私自身の心が表れていることで、それが絵を見た人々に届くのだと。

それ以来私は、絵を描くことで自己表現することを知った。美術の授業では、余計なことは考えずに自由に制作した。それまでは自分のやりたいようにやることに對して自信の無さと周囲の評価に對する恐怖心から遠慮を感じていたが、そういった邪念を捨てて作品作りに臨んだ。楽しみながら作り上げた作品の一つ一つは同級生や先生からお褒めの言葉を頂いて、私は少しずつ自分に自信を持てるようになり、描いた絵を隠すこともなくなったのだった。教室や廊下に作品を展示されたりコンクールで受賞することも増え、自分の作品が色々な人の目に留まることで 一度に多くの人から認められたような気分になり、素直に嬉しかった。

人の心を動かすものは決して言葉だけではない。目で見える絵、耳で聴く音楽、舌で味わう料理など、この世にはたくさん人のアートがある。姿形や手法は違ったとしてもそこには作者の心が宿っていて、人々の胸を打つ力を持っているのだ。私は人の心は非常に複雑なものだと思っていたが、それを動かす術は存外手のすぐ届くところにあるのかもしれないと絵を通じて知ることが出来た。

何気なく繰り返された毎日に何気なく色を添えていた絵という存在は、私の生活をがらりと一変させた。そして私は高校生となった今も、暇な時や気分転換したい時に気ままに絵を描いている。私と周囲の間にあった見えない壁を打ち破ったあの感動が、私が絵を描き続ける原動力だ。

言ってしまうとこの眼前に広がる世界は真っ白なキャンバスだ。白も立派な一つの色だが、やはり何か物足りない。そこに「私」という一本のペンが線や模様を描き、さらに私が誰かと出会うことで、その人の持つ「個性」という色がその世界を鮮やかに彩っていく。気付けばキャンバスは様々な色でいっぱいになり、いつしか一枚の立派な絵が完成する。それはまるで作者の人生を表す鏡のようなものであり、その一枚の絵を完成させるために私たちは今を生き、人との関わり合いを持とうとするのだろうと思う。

私はこれから先、あらゆる未知の世界を見て まだまだ余白のあるキャンバスに数々の出会いを描きたい。そしてそれを基に私だけの「アート」を作り出し、たくさんの人に「私」という存在を知ってもらいたいと願うばかりである。

優秀賞 隠し絵

上田 理紗子 滋賀県立膳所高等学校 1年

美術館の空気が、好きだった。

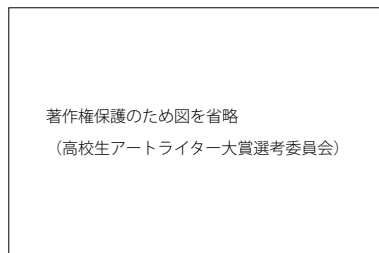
展示場に一步踏み入ったときの、ぴんと張りつめた感覚。静謐とも荘厳とも言いがたいその感覚に、自然と背筋がのび、足音を忍ばせずにはいられなくなる。日頃の生活で感じるどの感覚とも違って、非日常を感じることができるのである。

進んで出向くことはないが、母に連れられてきたときの最初の楽しみがこの感覚であった。

だから、その日展示場に入って感じたのは戸惑いと、ある種の嫌悪だった。

夏休みに守山市の佐川美術館で開かれた展示会「安野光雅展-あんのさんのしごと-」。その展示場は一言で言うならば、あまりにもうるさかった。私の好きな、どこかぴりとした空気は欠片も感じられなかったのだ。展示の半分ほどが絵本として発表されたものであったから子供が騒いでいるだけだと思ったが、うるさいのは大人も同様だった。挙げ句の果てに、絵に手を触れて注意される女性まで現れた。

元来私は、音楽や美術品など「すばらしいもの」に触れているときに話しかけられるのが大嫌いだった。私の中に満ちてくる「すばらしい」という思いが、外部から穴をあけられたボトルから漏れていく液体のように出て行ってしまう気がした。そんなとき、私は決まって思うのだ。静かにしてくれ、口をきかないでくれ。頼むから、私の「すばらしい」を損なわないで、と。たかが鑑賞を邪魔されたくらいで、と大げさに思うかもしれないが、これがこの時の私の率直な気持ちであった。



図A) 安野光雅 1968年出版「もりのえほん」より 安野光雅美術館所蔵

だから、私はひどくいらだってひときわうるさいところを睨んだ。そして見てしまったのだ。話し込む人々の、あまりにも生き生きとした笑顔とその先にある絵の数々を。

図Aは、そのうちの一枚である。いわゆる隠し絵であり、緑と黒で細密に描かれた森の中に何種類もの動物が組み込まれている。すぐに分かるものからなかなか見つからないものまで、その種類は様々だ。人々はそれを見て、連れと一緒にこれが虎だ、あれが馬だなどと話し合っていた。それにつられた私は、気づいた時には絵の前に立ち、母と二人で隠された動物を探し、挙げていた。答えが食い違えばその度に言い合い、ここだよここ、と絵を指差して、うっかり触れそうになってあわてたこともままあった。絵を触って注意されたあの女性の気持ち、よく分かった。絵の中に自分が見つけたもの、感じたことを相手に伝えて共有したいという強い思いが、見る者の心に湧いてくるのだろう。母に教えられて見えてくる動物や、反対に私が教えることで母が納得する様子が新鮮で、一瞬一瞬が一人では得難い時間だった。まるで一枚の絵を通して二人が繋がっているようで、私は奇妙な昂揚感に襲われた。今思えば、その時の私は自分がうるさいと感じた彼らと同じような声で話していただろう。それほどに、私はあの絵に引き込まれていた。このひとときで、私の中

の「すばらしい」は損なわれるどころか、いっそう生気を増したように思えたのだ。気持ちに生気を感じるとはおかしなものだが、それ以外の表現はふさわしくない気がした。実際、芸術において人の介入を断固拒否していたころの私の感性は冬眠の最中のようにがちがちであったから、間違っていないのかもしれない。

あれから数日が過ぎた今でも、私はあの経験が忘れられない。そればかりか、隠し絵は人と人との橋渡しに近い役割を担っているのではないかとさえ考え始めている。一人では最大限に味わうことのできない作品があるのだと、誰かとわいわいと話し合うことで新たな発見のできる作品があるのだと、私はあの日学んだのだ。

だから、今もし以前の私のような頑固者に出会ったら、私は迷わず

「誰かと隠し絵を見てごらん」

と言うだろう。そうすることで、きっと豊かな感性が取り戻せるはずだから。

あの日あんなに否定した騒がしい美術館も、今ならすんなり受け入れられる。

図版出典：[アートジェーン]山陰中央テレビ開局40周年記念 安野光雅の絵本展 8/18アクセス

<http://www.artgene.net/detail.php?>

EID=7934

本は芸術作品なのだろうか。ふと図書館から借りてきた本を見て思った。西洋の豪華な装飾を施した聖書や、「書」としてではなく「美」を意識してつくられた本は、中身だけでなく視覚的な「美」が評価され、保管されていたりコレクターたちが追い求める、ということはあるかもしれない。だが、私が普段よく読む小説などはそれらのような華美な装飾は、一見施されていないように感じる。果たして、それらは視覚芸術と呼べるのだろうか。

私が普段読む本というのは、今を生きている作家が描くフィクション作品が多い。これらはたいていどの本屋でも大きく扱われている。私がよく行く図書館でも、入り口からまっすぐ数秒歩けば広く置いてある。そして流動がとても激しい。あの人の作品が出たから読もうかなと思っているとすぐに、この人の作品も出てしまった、というように毎日本は変わっていく。最近の本屋に行くと、イラストや写真が使われている表紙のものがよく目につく。本を開けば、そうした装画やイラストを描いたとして紹介される人、装丁またはブックデザインをしたとして紹介される人を発見する。両者とも本の内容や雰囲気に沿ったものをつくらうとしている。では、私たちはどこを見てその本を買おう借りようと思うのだろうか。たいていはその本を書いた作者が好きだから、内容やタイトルに惹かれて、というのが多いだろう。だが時に、表紙を見て思わずはっとすることはあるだろうか。自分に合わなくとも、返すだけでよい図書館で多いと思うのだが、表紙を見て衝動的に本を借りてしまったことがある。その行動は果たして、なんなのか。

講談社ミステリーランドシリーズ。最初に手に取った綾辻行人著「びっくり館の殺人」(図1)は、もともと作者に興味を持っており、背表紙でその名前を見て何気なく手に取った。表紙の人形の絵がひどく不気味で印象的だった。開くとまず、紙の端が丸みを帯びていることに驚

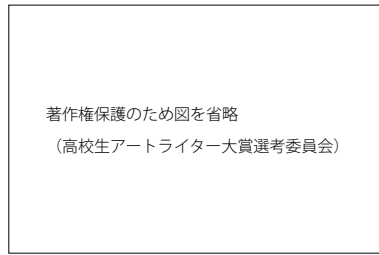


図1

いた。今まで読んできたものはどれもきっちり角ばっていたので、こうした丸みは新鮮だった。ゆったりとした行間。いつもとは少し違った文字。そして何より、挿絵が使われているページには色が入っている。赤であったり青であったり黄であったり、どのページも読んでいるときの緊迫感、疾走感、驚きにあった色が効果的に使われており、さらに本にのめりこんでいった。本を読み終わった後の充実感ともいえる何かやりきった、という感情がいつも以上に大きかったと思う。今思うとそれはやはり、これらの要素が絡み合った結果ではないか。高校生になり、学校の課題でこのシリーズの装丁をしている祖父江慎というブックデザイナーを調べた。その時に知ったことなのだが、この講談社ミステリーランドシリーズはケースと一緒に売られていたらしい(図2)。そのケースは丸く穴が開いており、表紙のイラストが見える仕掛けだ。図書館で借りて読んでいたので、ケースのない状態しか見ていなかった。しかしそのケースを合わせることで、「びっくり館の殺人」の表紙は人形の顔しか見えない。周りには何があるんだ、どういう状況なんだ、なぜこんなにも驚いた表情をしているのだ、様々な疑問や想いが交錯するこの仕掛けは、本を読ませたいと思わせてくれる。

今まで、私は本の表紙のイラストを見て、本を手に取っているものだと思っていた。しかし、こうしたイラストを選び、そのイラストのどの部分をどう使うか決めるのは、ブックデザイナーが大きく関わっているだろう。この本の世界はイラストレーターとブックデザイナー、双方の思いが交錯して生み出されてい

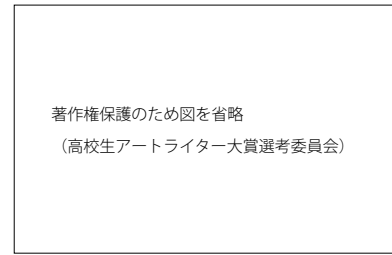


図2

る。本を開けば文字組や書体、目次といった細かい部分まで考えられている場合もある。そんなところ気にしないと思う人もいるかもしれないが、知らずに私たちはその世界に浸っている。本を手にとるとき、十人十色様々な理由がある。その一つの理由として、表紙で選んだというものがあるだろう。イラストの力は大きいかもしれない。だが、もうその時点で、私たちはブックデザイナーたちの魔法にかけられてしまっている。衝動的に本を借りてしまった理由は、こうしたイラストとそのイラストをどう使うか、考え抜かれたブックデザインとの融合のたまものだ。

本は芸術作品といえるだろう。文章を楽しむ、外の装丁や中の文字の美しさに感動し、驚く。これほど人々に美しさを感じさせ、わくわくといった様々な感情を引き出してくれるものを私は知らない。

参考資料

- 書籍；綾辻行人「びっくり館の殺人」(講談社、2006年)
- Web；講談社BOOK倶楽部:ミステリーランド「びっくり館の殺人 綾辻行人 講談社」(http://bookclub.kodansha.co.jp/books/topics/mystery_land/index.html, 2013年10月2日アクセス)
- 写真集・古本の買取/通販 七星文庫「七星文庫の在庫リスト」(<http://nanahoshibunko.com/honma/index.php>, 2013年10月2日アクセス)

優秀賞

私と芸術を繋ぐもの

大野 慈 共愛学園高等学校 1年

音楽は、目に見えない絵画である。視覚ではなく、聴覚で「みる」ものであると考える。第九を作曲したベートーヴェンや、神童とよばれたモーツァルトでさえ、頭の中で絵を描き、それを音として表現していた。そのような曲を、楽器を通して、またオーケストラを通して奏することで、作曲者の「描いた絵」に近づけて演奏する。これこそが音楽だと考えている。

中学3年の美術の時間、自分の好きな物事についてまとめる本「オリジナルブック」を作るという課題が出た。課題を知ってからずっと、「音楽」について書くとは決めていたが、音楽のすべてをまとめることは、スケールが大きすぎて書ききれないことが分かっていたので、何を書こうかと真っ白いホワイトブックを開きながら考えを巡らせていた。そこで辿り着いたのは、今まで演奏してきた事のある曲を作曲した作曲家についてまとめることだった。小学1年からずっと続けているチェロを弾くことで経験してきた、作曲家たちの偉大さや感動を1冊にまとめようと考えた。

「オリジナルブック」の構成は、だいたい1ページに1人の作曲家とし、それぞれの似顔絵を描いて貼り付けた。似顔絵を描いて気づいたことは、それぞれの顔から音が溢れているということだ。威厳をもった顔のワーグナー、神妙な顔でこちらを眺めている神経細やかなチャイコフスキー。どっしりと構えて温厚な顔をしているハイドン、など。どの作曲家も、似顔絵を描くことで、それぞれの生きた時代や生活感、それぞれの性格などがうかがえて、それが曲に直結していると感じることが出来た。似顔絵が浮き立つように、色紙に貼り、最後にパステルを使って古風な色合いにした。

似顔絵を描いた周りには、作曲家の生きた時代、音楽史に残した業績を書く。さらには、作曲家に対する自分のイメージや、今までに演奏した曲、これから演奏してみたい曲や、有名な作品を記し

た。

作曲家が生まれた国についても書く。有名な美術館や歴史的な建造物、有名な食べ物などの写真と共に、各国のイメージに合った色使いのマスキングテープなどでデザインした。

表紙には、アンティークな色合いの花柄の布を張り、少しばかり、作曲家への敬意を示したつもりだ。最後のページには、オーケストラの編成の図と、チェロの先生との演奏後の記念写真を張り付けて締め括った。

この本は、私の人生の3分の2を共にしてきたチェロとの大切な思い出が散りばめられている。チェロは、僕の想像力を深める道具であり、体の一部となっている。

この夏のオーケストラの講習会で、チェロの先生から教わった一番大切なことは、音楽は技術とインスピレーションが絡まりあってできているという事実があり、インスピレーションなくしては成り立たない、ということだ。曲のイメージが、絵のように浮かび上がるように弾くこと。音楽も絵画芸術も同じような精神構造で成り立っていると考えるようになった。

曲を演奏するとき、演奏家たちはその曲に潜んだイメージを汲み取って奏でていく。これにより、一つの曲から複数のニュアンスがある演奏が生まれる。その演奏を聴いた聴衆も、自身の中に曲に対するイメージを生む。音楽とはこうして、人と人との間で絶えずその色彩が変化してやり取りされる絵画なのだと思う。

音楽と絵画芸術の相違点と繋がりを考えてみる。最も大きな違いと言えるのはやはり、「目に見える世界」を描くか、「目に見えない世界」を描くかであろう。音楽と絵画、それぞれのメッセージ



を受け取った人は、音の中に色彩や絵を感じたり、絵画の中にリズムや音の流れを感じたりする。「動」と「静」このどちらもが、私たちの心の中を映し出す鏡であるといえるのではないだろうか。

音楽は、流れゆく時代と共に変化し、受け継がれてきた。音を響かせることは、生命の多様性にも匹敵するほどの複雑さははらんでいる。ひとつの曲に秘められた人間ドラマや作曲者の思い、時代背景などに思いを馳せ、その時代にタイムスリップしたような気持ちになれる…このことこそ、私の想像力を掻き立ててくれる大切なことである。

「オリジナルブック」それは、音楽と絵画と私の繋がりを意識させるものだった。この製作により、より作曲家たちを身近に感じられるようになり、新たな演奏を模索できるようになった。

私はこう考える。人生に連鎖して出会い経験して積み重ねられた思いは、音となり、人から人へ伝わるのだ、と。これからも描いていこう。見えない絵画を



「空は美しい。」そう思い始めたのはいつ頃なのか、私にはわからない。わからないということは、おそらく物心のついた頃から、私は空に感動を覚えていたのだろう。どこにでもある、見慣れた空。それでも、僅かで繊細な変化で何度も感動させてくれる空。深く考えることも知らない幼いときから、私はそうだった大空の芸術に心を奪われていた。

私は今年の夏休みに、何度か早朝のサイクリングに出掛けた。始めは偶然朝早く目覚めた天気の良い日に、ふと外に出たくなって、自転車で家の近くを回っただけだったが、段々それを楽しく感じるようになり、遠くへ行ったこともあった。そのサイクリングの最中、常に私を上から見ていたものこそ空である。このときも、やはりそれは美しく、私は止まることがある度に見上げていた。

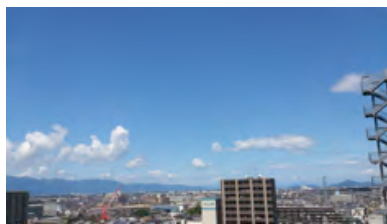


(図1 琵琶湖[近江大橋西端付近]早朝の空)

上の写真(図1)は、早朝サイクリング時に撮ったものである。空は曇ってこそいるが、その隙間から日の光が差していて趣がある。

このような写真をみていて疑問に思うことがある。それは「何がこの写真の空を美しく見せているのか」というものである。人によってはこの写真をきれいだと思うかもしれないので、これは主観的な話になる。すぐに思いつく答えとしては、雲の量、光の加減、空の色などが挙げられる。もちろん、これらも要因の一つであると思うが、一番大きな要因は何だろうか。結果からいうと、私はそれを「地上の存在」だと考える。

そう考えた理由を説明するため、次の写真を見てもらいたい。



(図2)

図2は、屋間に撮った空の写真で、ほぼ快晴といえる天気の良い空が写っている。青い、澄んだ空に白い雲が浮かんでいて、代表的な空の姿といえるだろう。では、この写真から地上を隠すとうろく見えるだろうか。



(図3)

図3が地上を隠した先ほどの写真である。当然、一部を見えなくしても美しいが、私はどこか寂しく感じる。もちろん、建造物や山が無くなったので、写されているものが少なくなったから、という理由もあるだろうが、それだけではなく、図2を美しく見せていた「何かの存在」が足りない気がしないだろうか。その差が図3に寂しさを感じさせているように思う。

美しいとはいえどもありふれた景色となっているこの空を見て、まず感動する要素がないという人も多いのかもしれないが、私は図2と図3の写真に差を感じた。その差を生んだ要因は地上の有無だろう。前述したように、全体のバランスが崩れたこともある。しかし、それだけでも思えなかった私は、もう一度外に出掛け、空だけを見て、次に地上が視界に入るよう空を見て、その差を考えた。

すると、私は空とは無関係に思えることに気が付いた。空だけを見ようと上を向いているとき、私は周囲にいる人たちのことを全く意識していなかった、というのがその発見である。それがどう関係しているのかといえば、空だけを見ているとき、私たちが「現実」を実感し

きていない、ということだ。ここでいう現実というのは、厳しいとか逃げたいとかいわれているものではなく、身の回りの世界のそのありのままのことである。

つまり、私たちは空を見ているときにその景色を何か現実とは違うものとして見てしまっているのではないかと、言いたいのである。テレビ、本などで大自然の美しさを見て知ることが可能になったことで、身の回りの都市と自然が別々のものだという思い込みが強まり、身近な自然の芸術に疎くなっているのではないだろうか。だから、ただぼろっと目に映る景色でなく、写真という形で人間と自然の芸術との距離を見て、どちらか一方だけのものを見るよりも感動を得られたのではないだろうか。このように考えた結果、「地上の存在」、すなわち都市という「人の存在」が疑問の答えだとしたのである。人が自然を大切にしなければいけない現代だからこそ、人と自然の本当の距離を知り、またその芸術に感動することが必要だと思う。自然とは、田舎にだけあるものでも、山に行かなくては触れ合えないものでもなく、身近にも存在するものなのである。

今回、私は身近な自然のアートとして「大空」を挙げた。前述してきたように私はその芸術に感動してきたが、この空も人によって汚されつつある。空だけでなく、山や川などの自然もまた被害を被ってきた。もちろん、現在ではその対策が進められているが、未だ解決されていない問題も多くある。そんな中で、そんな中だからこそ、大自然の美しさ、より身近な自然の美しさを知り、感動し、大切にしたいと心から思うという経験をすべきだ。

アートには、人と人、心と心、人と自然など、多くのものを結びつける力がある。私と大空がアートでつながったように、多くの人がアートで人、また自然とつながっていけば、より心は深く、広くなると思う。これからもそのアートと関わりをもっていきたい。

この作品にはじめて出逢ったのは、実は中学校2年生のときであったのだ。栃木県立美術館へ夏休みの課題レポート作成のために行ったときである。私にとってこの課題は正直面倒くさいもので、たいくつであった。レポートを書くために、わざわざ美術館へ行き、感じた事をプリントに書き込む。このような作業が苦手な私はとてもではないが、苦痛であった。それから一年後、中学3年生になり、今年も行かなければ…と重い気持ちで美術館へ向かった。しかし、それは一瞬で覆された。そう、作：鬚嘔の「レインボー・レイン」によって…。

レインボー・レインDとの出逢い

私は、いつもの通り美術館の中の作品をひとつずつ見ては、感じたことを1、2行書いて…という繰り返しをしていた。次の絵に行こうと思い、進んだ。前の年と変わらない場所であったため、すぐに思い出した。異様に大きいなと思いながら見上げてみると、虹色の線が垂れていた。これこそ、“レインボー・レイン”だ。(図1) 昨年の印象とはあまりにも違っていた。とてもきれいで私は、そこに立ち尽くしていた。まるで、希望の虹のように思えた。このとき、直ぐには感想を書けなかった。この年は友達と一緒に行った。その友達はこの作品を見て、「きれいだね。なんか、とっても心に残る作品だね。」と言っていた。私は、頷くことしか出来なかった。その時、私は今までのつらい出来事を思い出していた。そしてまた、この作品を見た。今までのことがちっぽけに感じてきて、この絵のようにもっと広い世界に幸

せの雨が降るのだと思えた。つらいことや、悲しい事があるから、その分幸せが、明るい世界があるはずだと思えた。そして、出逢ってから2度目のこの年は感想をたくさん書いた。2年分たっぷり書いた。私の絵に対する気持ちが変わったのは、このときからである。

レインボー・レインD 鬚嘔

この絵は、私から悲しみを取り除き、明日への希望を見せくれるようなものであった。悲しみの涙を流し、その先には虹という希望や、夢が待っているとでもいっているようだ。「画面最上部ではほぼ同じ幅の帯状だったものが下に行くにつれてゆがみ、たわみ、溶けていく。巨大な画面とあいまって、作品を見る者は虹色の雨の降る中に立ち、自らもまた溶解していくような感覚を覚えるだろう。」

まさに、この通りの感覚であった。普通、雨が降る絵は、気分はどちらかというと、悲しくなったり、気分が重くなったりする。しかし、不思議なことに、重くならず、明るく、前向きな気持ちになってしまうのだ。これは、虹色の効果だと思う。また、鬚嘔はこのような虹色の作品を、多く描き出している。国内外では、「虹のアーティスト」とよばれている。虹がどのような効果をもっているのかを、深く知っているからこそ描ける作品なのだろう。

これから

高校生になった今、私はこれから国内各地あるいは海外に出て、鬚嘔の作品にたくさん出逢ってみたいと思っている。

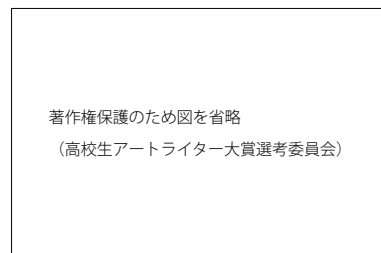


図1 作者：鬚嘔
《レインボー・レインD》259×194
カンヴァス、油彩 1977年

このような虹色の作品を描ける人は、なかなかいない。絵に対してあまり興味を持っていなかった私にとって、忘れられない作品となった。また、大人になった時にこの絵に再会したとき、私はどんな気持ちになるのだろうか。今の私のような気持ちになるのだろうか。それとも、ちがう気持ちになるのか。これは私にとっての永遠の宿題だ。なかなか忙しくて美術館に行けないこの頃であるが、時間を少しとってこの絵にまた再会したい。そして、またこの絵にたくさんのパワーをもらいたい。この出逢いは、偶然と運命のどちらになるのだろうか。

引用・参考資料

- ・栃木県立美術館
www.art.pref.tochigi.lg.jp (9月16日にアクセス)
- ・鬚嘔 ふたたび虹のかなたに 展覧会概要 - 東京都現代美術館 ...
www.mot-art-museum.jp/exhibition/131 (9月16日にアクセス)

図版出典

- 図1 ・Ay-o, Rainbow Rain D, 1977 - CINRA.NET-シンラ
www.cinra.net/news/viewer.php?eid=11358&id=6

自分が作ったと堂々と言える作品が作りた。しかし、美術学校での実習では、自分は今まで納得のいく作品を1回も作れていない。何がいけないのか、何回も考えた。参考として懂れている作家たちについて調べていると、そのうちの1人が教えてくれた気がした。自分は作品を、「きれいなもの」にしようとしていたのだ。美術とは「きれいなもの」なのか、「美しい」とは何なのか、改めて考えてみる。

作品に登場する人々の乳白色の肌、14匹の暴れる猫の絵、眼鏡とおかっぱ頭が彼のイメージだった。洋画家、藤田嗣治が戦争画家として活躍していたことは最近知った。小学生のときに見たいくつかの作品の記憶は、悲惨な戦争の情景が描かれた戦争画とはすぐに結びつかなかった。大戦のときに描かれた絵を調べてみたが、あの穏やかな乳白色は無く、代わりに、静かな怖さ、儚さを感じた。震撼した。訴えかけられた気がした。

フランスで暮らしていた藤田は、戦争時日本に帰ってきていた。国民を鼓舞するためという理由で戦争画を依頼された藤田が、実際に戦地に立って描いた最初の絵を見た。正直、戦地に立って描いたというのは嘘だと思った。迫力も臨場感も無い、ただ言われたように現場を描いただけのまさに世に言う戦争画。何も感じなかった。しかし彼の絵は、戦って帰ってきた兵士たちの実際の話をもとに描くことで、急激に変わっていった。

ひとの話をもとに描いた絵が、実際に現場に行き描いた絵よりも臨場感があるなんてことは考えられなかった。しかし藤田が兵士の話をもとに描いたそれらの絵は、どれも戦場にいた兵士の目線になっていた。怖い、逃げたい、戦いたくない、でも、死んでいった部下たちを踏みつけていくロシア兵が憎い、殺したい、でも、怖い。そんな兵士たちの感情が自分の体に移ったようだ。最初に感じた静かな怖さは、その悲惨な絵の内容でなく、兵士が藤田に必死に訴えたその魂からなるものだったのだ。どんなテクノロジーでも再現できない臨場感、そして絶望を感じさせるこれらの絵を見

て、誰が戦争をしたがるのだろうか。「戦争画」とは、本来こういったものはずだと感じた。

今の情報社会では、海外の作品や作家について、幅広く、迅速に知ることができる。戦争の無い国が、戦争を止めたい気持ちを作品を通して伝える手段もあるのに、まだ戦争は消えない。所詮これが美術作品の限界なのだろうか。

藤田の作品の中にはひとつ、少し違った雰囲気のある作品がある。日本兵がロシアの戦車を襲っている。日本兵の圧勝を感じさせる絵だ。実際は人对戦車の戦いと言えるほどの惨敗。「哈爾哈河畔之戦闘」というまさしく国民を鼓舞するその絵。このような絵を世に出したのか。少し失望した。

しかしこの絵は1枚ではなかった。発表されていないもう1枚が存在していて、2枚で「哈爾哈河畔之戦闘」なのだ。そのもう1枚を見たとき、やっと意味が分かるらしい。その絵の内容は、日本兵の阿鼻叫喚、死体の山を踏み潰すロシア兵だという。1人の日本兵の個人的な依頼であった。死んでいった部下たちの霊を慰めたい、と涙ながらに依頼してきたその兵士の目線なのだろう。死体の山は、物でもごみでもない。生まれ、育ち、戦った兵士だ。人だ。生きていたのだ。

もちろん、戦場に行く気が無くなってしまふようなその絵は国に認められることもなく、1部のものしか2枚1組の全貌を知らない。しかし僕は、そんな絵の「存在」を知っただけで、むなしさや不快感、静かな興奮、そして自分の心が少しずつ動いているのを確かに感じた。それは、ただグロテスクなイメージしかなかった戦争画の見方が大きく変わったことともう1つ、自分の美術に対する価値観が変わっていたのだ。

「きれいな」作品が高く評価されることは決して奇妙なことではないが、きれいでなければ「美しく」もないのか。もしそんな世界なら、僕は美術の道を歩まないでおこう。「美しい」が作品を見た人の「言葉にできない感動」の代名詞だとすると、造形美や色彩美だけで判断で

きるものとは限らないはずだ。藤田の戦争画にあるあの臨場感が、僕は「美しい」と感じた。「きれい」だとは決して感じない。自分がそこに残したいものは何か、それを何よりも優先させるのが本質なのだ。

藤田は、「日本画壇も早く国際基準に達してください」と残し、2度と日本に戻って作品を作ることは無かった。戦争に協力していたとして、国を追われたのだ。はかり知れない悲しみがあつたはずだが、その後の藤田の絵にはあの大好きな乳白色がもどっていた。自分にとっての美も健在だったのだ。しかし、このように作者の意図を押さえつけることはもうあつてはならない。

人間は感情を言葉に変え、言葉でも表せないことは形に変えられる。戦後の藤田の絵も、様々な感情が見えた気がする。僕は意図的に「美術」がしたいのではなく、言葉に変えるのが苦手な自分の内側を、形に表したかったのだ。実際にその後、言葉に出せない感情をテーマに作品を作ったが、今までに無い充実感を感じた。決してきれいではない生々しいデザインだが、「自分はこんなに美しいものが作れたんだ」と、流石に口に出すのは恥ずかしいが本気でそう思える。人の作品からここまで成長させてもらえるとは思ってもいかなかったが、藤田の作品に出会って作品の見方も大きく変わった。残念ながら自己満足だけでは生きていけない世界なので、まだまだ学ぶことはたくさんある。しかし自分の「美しい」が分かった今、自分はもう美しいものしか作れないのではないかと思うぐらい期待が膨らんでいる。きれいでなくていい。自分でも見えない自分や、自分が知らない自分に会わせてくれるような作品を作りたい。たとえどんな形や色でも、それは必ず美しいはずだ。

私は小学生の頃、図工の授業で夜空に浮かぶ青い花を描いた事がある。その絵は図工の先生、担任の先生、家族に大変好評だった。今でも、祖母の営む店先に額に入れられて飾ってある。

私は、その絵を見る度に

「この時の私は何故空に浮かぶ花を描いたのだろう、何を考えていたのだろう。」

と考えてしまう。それと同時に、

「子どもの考え方とおとなの考え方はなぜ違うのだろう。」

とも考える。子どもの頃は、絵を見たら純粋に「花がある」と考えるのに対して、大人は、「夜空に浮かぶ青い花がある」と細かく分析して考えるように思う。小学校の図工の授業と中学校の美術にもそれは言えると思う。小学校の図工では、アレを描きましょうコレを作りましょうと自由に描き作り出す事が出来るが、中学校の美術では、コレを考えながらアレを描きなさい、ソレを踏まえてコレを作りなさいと制限されてしまう。専門的になれば考えながら制作しなければならぬというのは当たり前なのだが、私は、考えるのはパッケージデザイン等のデザイン課題だけで、絵は、何も考えず、思ったままに描きたいと考えている。

しかし、自由に描いた絵でも、人に見せれば「コレはどういった考えを表しているのか」と分析されてしまう。子どもは「赤い花だね」「青い花だね」「黄色い花だね」と純粋に見たままの事を言ってくれる。もしかしたら、かの有名な絵画も思いつきで描かれただけかもしれない

い。大人達はただ、そんな絵に自分達の適当な考えや分析したものを押しつけているだけかもしれない。そう考えると、いくら頑張って描いた絵でも、自分の考え方というものを説明しなければ理解される事はないのではないかと考えてしまう。絵だけを見て感動してもらえる事はないのではないだろうか。でも大人は理解しなくとも子どもは違う。

私には十歳離れた歳下のはとこがいる。ほとんど会う事はないが、たまに会う機会があると、私の描いた絵を見たがる。見せられるものではない…と恥ずかしながらも見せると、はとこはパアッと目を輝かせながら、

「すごいねえ、すごいねえ」

と言う。すごいとだけしか言わないのだが、私にはそれだけで十分である。それまで意味を持たなかった落書き同然の絵が、はとこにとっては「すごい絵」になるのだ。はとこだけでなく、幼馴染の弟にも見せると、

「かっこいい、きれい」

と言ってくれる。その子にとっては「かっこよくてきれいな絵」になる。こういった瞬間、子ども達の純粋に喜ぶ声を耳にした時、私は絵を描いていて良かったと心から思える。傍から見れば自己満足のように思えるかもしれないが、大人に勝手な解釈をされるよりは何倍も良い。それならばきちんと解釈されるように描けばいいのでは、と思われるが、それは違う。一目見て「楽しい」「切ない」と感じてほしいのだ。私が求めているのは解釈ではない、感動なのだ。青い花を描いた頃の、純粋に青い花を描いた

幼い頃の感動を、私は人に感じてほしい。言葉を借りるならば、

「考えるな、感じろ」

まさにその通りだと思う。

今の私の描く絵では、まだ伝わりにくい点も、多々あるだろう。今はまだ身近な子どもにだけしか伝える事のできない絵だが、今後は大人にも伝えられるようにしなければならない。もちろん、自分のやりたい事だけで食べていこうとは考えていない。絵に関する仕事に就きたい。ほんの片手間にそういった絵を描いて、それを見てもらって、子どもの頃の純粋な気持ちで感動してもらおう。そういった事がしたい。人は、絵の解釈を知った時や作者の心情を読み取った時ではなく、絵そのもの、色や構成や筆使いだけで感動できるという事を知ってほしい。絵は、言葉で表す事は出来ないのだ。

今思うと、あの青い花は無意識のうちに、私が不思議に思っていた子どもと大人の違いを予感して描いたものかもしれない。青い花の周りに描かれた蝶は、無意識下に思い描いた大人達なのかもしれない。そう考えたら、昔の私はなんて不思議な花を描いたのだろうと思う。子どもは、おとなにはない力を持っているのではないだろうか。そう考えると、大人になるという事は、なんてもったいない事なのだろうとも思っている。

優秀賞

幼い頃の夢

古賀 瑞季 熊本県立第二高等学校 3年

私は今、幼い頃の夢を絵に描いています。「○○になりたい」という将来の夢や、寝るときに見る夢ではありません。ああしたい、こうなったらいいな、と現実離れたことを夢に描くだとか夢に見るとか言いますが、この「夢」のことです。

私は自然に囲まれた海の近くの町で育ちました。こんな自然豊かな町でゲームが大好きで、そればかりしていた私ですが、1つだけゲームよりも好きなことがありました。それは、水に潜ることです。夏休みになると、海や川、小学校のプールで遊び、とことん水に潜りました。海や川に限らず、水に潜ったときに見える普段とは違う世界が私にはすごく神秘的に見えて、泳ぐというより、潜ってその世界に浸っている方が好きでした。

小学校2年生のある日、そんなことばかりしている私に衝撃を与えたものがありました。それは、某子ども向けアニメでした。アニメの中で街が洪水になり、主人公が街を魚などと一緒に泳ぐシーンがありました。それを見た瞬間、あまりの興奮にテレビの前でわなわな震え「私もこれがやりたい！」と強く思ったのです。とはいえ、こうすることは無理だとわかっていたので、子どもながらに考えた結論が「家に水をいっぱい溜めて泳げばいい！」でした。私の家が魚屋だったこともあり、「こうしたら魚とも泳げるんだ。」と思い、その日から家中を駆け回って、家の外に水が出ないようにすべきところをチェックしに行きました。あの時ほど、キラキラしている自分はいませんでした。しかし、結局のところは、

魚の入っている生け簀を見て、ウツボがいたので、できないと思い実行はしませんでした。電化製品とか教科書や本など、はどうするんだ！ということも後々になってから思いましたがそんなことも考えられないほど、あの時はそのことに夢中でした。それを機に、どこへ行っても「ここに水をためて泳いだらどんな感じかな。」と考える癖がつくようになりました。

しかし、そんなことを考えていたのも、小学校4年生頃まででした。小学校を卒業し、部活動などで忙しい中学生生活を送っていると、そう考えていたものも次第に記憶の奥底にしまわれてしまいました。

そして、その記憶を再び掘り起こしたのは、高校二年生の夏でした。その日は土曜日で、学校の課外がおわり、まだ太陽の高いお昼の時間に下宿にかえったので、階段をあがりながら、「暑いから水に浸かりたい。」とっていました。すると階段を上がり終えてふと廊下をみると、私が幼いころに「水をためたい」とよく思っていた場所と似ていて、ぱっと記憶が蘇ってきました。さらに、私はもうすぐある絵画展に絵を出したいと思いエスキースを考えていましたが、なかなか描きたいものが浮かばずに悩んでいました。そして、この瞬間に「これを絵にかこう！」と思ったのです。そして書いた絵がこの絵です。

「小さい頃の夢」という題で描いたこの絵は、今まで作った作品の中でもとても楽しんで描くことができた作品です。技術面ではまだまだですが、将来もっと絵の技術をつけ、本当に泳いでいるかの



図1 2012年 F50 油彩 「小さい頃の夢」



図2 2012年 F50 油彩 「教室の私」

ような楽しさを絵で表現できたらいいなと思っています。幼い頃にはできないと思って諦めていたことだったので、こういった形ではありましたが実現できたことにとてもうれしさを感じます。それも私の好きな「絵を描くこと」によって。このような体験も踏まえ、私はアートに出会って、まだまだ未熟ではありますが、この道に進んでよかったと心の底から思っています。もっと勉強して、深くまでアートを知り、一生アートとかかわっていくことが今後の希望であり目標です。そのために、今の一日一日を大事に生きていきたいと思います。

優秀賞

この瞬間

小松 春香 須磨学園高等学校 1年



私は風景を撮るのが好きだ。撮りたい風景があってわざわざ京都まで足を伸ばしたこともあった。また、ごくありふれた日常を撮るのも好きだ。私は同じ写真を何度も撮る。日をかえてもう一度撮りに行ったこともある。

この写真(図1)は、私が最近撮った写真の中で最も気に入っているものだ。日の光を浴びて木々の緑がきらきらと輝いている。重なり合うたくさんの葉の間から漏れた光が水面を照らしている。これは、京都のある人気のない公園の昼下りの写真だ。この写真どう?と聞かれても、ただのありきたりな、どこにでもありそうな写真に見えると答えるのは普通だろう。この瞬間でなくても見られる風景に思える。でもこの後、右下の竹は流れていき、日も沈んでいった。私は何度も何度もシャッターを切ったけれど、一枚として同じ写真はなかった。私が同じ場所で何度もシャッターを切ってしまうのはこのせいだ。なんで?同じ景色じゃん、とよく言われる。でも私には同じ景色には見えないのだ。光の角度が違う、葉の重なり方が違う、水の散り方が違う。全てが微妙に違うのだ。風景はその瞬間、その瞬間で表情が変わる。芸術作品も同じだと思う。その時の筆のあて方、力の込め方で作品は随分と変わってくる。作品は「その瞬間」を生きているからこそ美しいのだ。

私は中学生の頃、美術部に所属していた。毎日絵を描く中で一番好きだったことは、ペンスケッチだった。別に特別なことをするわけではなく、単にペンでスケッチをする、いたってシンプルなことだった。でも私はそのペンスケッチであ

る大切なことを学んだ。

私は中学二年生までスケッチは鉛筆でしていた。なぜなら間違えたら消せるからだだった。私はできるだけ実物に近づけることに一生懸命になっていた。自分の目標だけを見て、それだけに夢中になっていて周りにある大切なことに気づいていなかった。

ある日、自分ではとてもうまく描けたと思ったスケッチを先生に持って行ったときのことだった。私ははっきりほめられるものだと思っていたその作品を先生はちらりと見てこう言った。

「ペンでスケッチしてみたらどうだ?何か新しい発見があるかもしれないぞ。」

私はびっくりした。何でこの作品については何も言ってくれないんだろう。この作品のどこがいけないんだろう。私ははぐらかされた気分になった。でもそれと同時にペンスケッチへの興味が湧いてきた。もしかしたらペンスケッチをすることであの時先生が何も言ってくれなかった理由がわかるのかもしれない。

初めはペンスケッチなんて鉛筆でスケッチするのとそう変わらないと思っていた。しかし実際に描いてみると全く違うのがわかった。ペンスケッチだと一度描いたものが消せないのだ。当たり前でしょ、ペンなんだから、と思うだろう。でも描いたものを消せるということが当たり前だった私にとって、ペンスケッチは思っていた以上に難しかった。最初の点を打つ場所を決めるのも一発勝負。重ねて描くことも鉛筆ほど許されない。私は以前より対象物をよく見るようになった。

た。自分の思っていなかった所に線が入るとそれを活かそうとした。

確かに鉛筆で描いていた方がきれいだったかもしれない。実物に近かったかもしれない。でも、ペンスケッチをしてみても気がついた。実物に近づけることに一生懸命になっていた頃の私の絵は生きていなかった。一度描いた線を消すことで私はその作品の“その瞬間”の表情を消してしまっていたのだ。

ペンスケッチの後で見た絵は今までは違っていた。今までは見えていなかったものが見えてくるようになったのだ。それまでは気にも留めていなかったような真っ白のシャツに浮かぶ黒い点や静かな水面に立つ小さな波にも作者の気持ちが込められているように感じるようになった。それは美術館に飾ってある作品に限ったことではない。友達が描いた絵や家族で作った思い出の品にも言えることだ。作品はそれぞれの“今”を生きている。そしてそこには作者のその瞬間の気持ちが込められている。作者の気持ちと作品を鑑賞している人のその瞬間の気持ちが解け合ったときに人は感動し、また懐かしみ、美しいと思うのではないだろうか。

優秀賞

これが月岡

栄田 壮士 広島県立可部高等学校 3年

多くの日本の伝説マニアなら一目見てすぐに何を描いた絵なのかわかるはずだ。これは「羅生門の鬼」を描いた浮世絵だ。羅生門の鬼の物語とは、平安時代の豪傑、渡辺綱が羅生門（羅城門と書くのが正しいが今回は羅生門で統一する）に出る鬼の左の腕を斬り取ったという有名な物語である。これをモチーフとした浮世絵は数多く残されているのだが、その中の一つがこれだ。誰が描いたか、その名は月岡芳年。幕末の浮世絵師だ。彼は歌川国芳のもとで絵を学んでいたため、芳年の「芳」は、国芳から取ったという。さて、月岡芳年の特徴とは何といってもリアルな描き方。当時の浮世絵としては新しく、珍しい描き方をしているのだ。その中でも興味をもったのが「羅城門渡辺綱鬼腕斬之図」である。まずは構成から見てもらいたい。これは二枚の絵が一つになっている二枚作。つまり、このようにすることでダイナミックに表現することができるのだ。それだけでなく、ここに描かれている鬼と侍の姿を際立たせている。侍の名は渡辺綱。源頼光四天王の一人で、四天王の中でもリーダーシップがある男だ。彼は羅生門に鬼は出ないことを証明するため、雨の中「禁札」を門に立てにきたのだが、ただならぬモノを感じたのか。ここに写る渡辺綱と馬に緊張感を感じる。時にこの馬がいい。馬に乗った姿を描いたのがすばらしい。次は鬼について説明しよう。鬼の名は、茨木童子という。彼は丹波国は大江山に住む酒呑童子という酒が好きな日本最強の鬼の家来と伝えられている（一説には酒呑童子の弟でもある）。その鬼を月岡芳年はこう描いた。まさに、今すぐにもでも喰らいつきそうな姿は、本当に妖怪、本当に鬼だ。羅生門の柱にしがみつ、髪の毛は逆立ち、下をにらみついているため、恐ろしさが伝わるのだ。さすが酒呑童子の家来だけはある。それを芳年は描いた。一目見ただけでそれはわか

る。

芳年の描き方は本当に新しいといえる。もっと分析して観てほしい。渡辺綱と茨木童子の表情に注目。渡辺綱の上を眺めているこの顔。かつてこれまでの浮世絵の描き方とは明らかに違うことがわかる。従来の浮世絵の人物を見てみると、確かに上を向いているように見えるが、描き方としては、頭を傾けているだけのようにも見えてしまう。しかし、芳年は違った。ある一定の角度による目と鼻の見え方を忠実に描いているのだ。これだと、立体感が表現できているため、リアリティのある絵に見えるのだ。鬼の顔も同じだ。下を睨み付ける表情はまさしく鬼という「恐ろしさ」を感じさせてしまう。しかし、芳年の凄さは、リアルがすべてというわけではない。浮世絵の要素をきちんと残している。それは、この羅生門の絵の中の雨だ。雨の描き方だ。よく見るとわかるが、線で表現している。これを見て思い出したのが、安藤広重だ。今頃は歌川広重と呼ぶのがあたり前なこの人物は、雨を線で表現している。そうすることで雨の強さが人々に伝わるからであろう。ただ適当に描いているわけではないのだ。その浮世絵独特の表現を残したことで、この一場面を恐ろしく際立たせている。それと、一つ思ったことがある。芳年の作品は、どれも、絵の線が細いため、これは現在のイラストに近いのだ。いや、もしかしたらイラストはここから始まったのかもしれない。イラスト、もしくは漫画だ。漫画も線で表現し、かつ、リアルな表現をしている面もある。これらの条件がすべて芳年の絵に含まれていると思う。

しかしなんだろう。芳年の絵がすごいと思えるのは、リアルに描かれているだけだろうか。もちろん、浮世絵の独特な表現は捨てていないと言ったが…。なんだろう。他と何が違うのか。と、思いもう一度芳年が描いた羅生門を観た。そし

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)



て、今まで観てきた多くの羅生門が題材の浮世絵を思い出してみた。そして、僕は気づいた。一言で言うと、「芳年は、あたり前に描かない！」別の言い方をすると「普通じゃ許されない」どうか教えて。あくまで僕の意見だが、羅生門の浮世絵といえば、渡辺綱が茨木童子に襲われている場面か、渡辺綱が茨木童子の左の腕を斬り取っている場面のどちらかが主流である。しかし、芳年の羅生門はどちらかの条件を満たしているだろうか。いや、満たしていない。茨木は綱を襲っていないし、綱も茨木の腕を斬っていない。そう、芳年は「羅生門」の有名なシーンの直前を描いたのだ。嵐の前の静さというわけ。これが、芳年の技術なのだ！（了）

引用資料・「衝撃の絵師 月岡芳年～幕末・明治を生きた最後の浮世絵師～」p58

優秀賞 自画像

高浦 実央 大阪府立港南造形高等学校 2年

私が高校に入り、油絵を通して、自画像を描き続けるようになったきっかけは、とても些細なものだった。私は高校一年生の夏、大阪で開催される高校展という展覧会に向けて、出品する作品のテーマを探していた。その際、部室の片隅に置かれた割れた鏡を発見した事が、そのきっかけであった。その頃の私は油絵を始めて日が浅く、どういったものを描いていかよく分からなかった。なので、先生に言われるがまま、その割れた鏡に映った自分をただ「少し面白い。」程度の気持ちで書く事にした。

しかし、描き始めてから日が進むにつれ、作品の中の自分に感情移入し、あたかも作品を通して自分と対話しているような感覚に襲われるようになったのだ。私は、もともと自尊心が低く、ネガティブな気質だった。その事もあり、割れた鏡に映った自分を見て、自分が否定されているような気分になり、自分の負の感情と向き合わざるを得なくなっていた。そして、「否定」（図1）と名付けられたその作品以降、私は、自画像を通して自分と向き合い、感情を自画像で表現していこう、と考え、自画像を描き続けるようになった。

自画像を描き続けるようになってから、周りの人から、「ナルシスト」や「自分が大好き」といった評価を受けるようになった。作品の意図はいつも真面目だった。しかし、モデルとなる私の顔があまり美人ではないためか、私の感覚がずれているのかわからないが、私の作品はどこかシュールに見えるようだった。しかし、私は作品の意図が友人や親に伝わらなくて意気消沈する事はなかった。それよりも私は、自分の作品で「面白い」「ユニークだ」と喜んでくれる人達が居ることがたまらなく嬉しかった。自分の承認欲求を満たしてくれる貴重な人々を大切にしたい、と思った。そして私は、少しずつ「本当の作品の意図は自分の心の中にしまっておいて、誰かが楽しくなるような作品を描こう。」と思い、作品を制作するようになっていった。

そして、高校二年生の夏、二回目の高校展に出品するために私は作品を制作した。その作品は、同じ部活の同期や後輩が同じく高校展に出そうとしている作品

が、私の作品の中にかけられているというものだった。（図2）これは、見た人が「この絵に描かれている作品、あそこに飾ってある！」といったような作品を見た人が楽しめるように、といった意図で描いた仕掛けだ。しかし、高校展が終わった後、不満が一つ残った。それは、見る人に媚び過ぎて、自分の感情がないがしろにされてしまったのではないかと、いったものだった。あの作品にも、真面目な意図というのが別にあった。しかし、仕掛けを前面に出し過ぎて、見た人が作品の意図を考える前に、仕掛けに全ての興味を持っていかれたのではないかと、という、虚しいような複雑な感触が後に残った。この作品は結果的に成功しているのだが、自分の中ではわだかまりの残る作品となったのだ。

油絵で制作を始めて一年半。まだまだ日は浅いが、自画像を通して制作の根本となる思想を何度か考えた事がある。そして辿り着いたのは、「自分の感情表現と、見る人への配慮のバランスを取る。」という事だ。自分の感情表現を十として絵で表現する。すると、作品を見た人がよく分からない、といった感想を持つような、一人よがりの作品になってしまうだろうと私は考える。作品は、見る人が居ないと成立しないと思う。しかし、今度は見る人が楽しめるようにだけ配慮して作品を描く。これは見る人本位で作られた作品なので作品としては成功するだろう。だが、作者の、表現をする立場としてのプライドはどうなるのだろうか。

近年、音楽やイラストなどのサブカルチャーで、見る人本位で作られた作品を多く目にする。工作上、需要と供給を成立させなければならぬのは当たり前だ。だが、ネットやテレビで流行を多く取り入れた、一見見分けがつかないような作品が乱立していると、作者の意図は本当に反映されているのか？と深く考え込んでしまう。このような流行に応じた作品があるから、これまでの美術史は出来てきたのだと思う。し



図1 高浦実央 「否定」
F50号、パネル、油絵、2012年

しかし、近年は特にイラストやライトノベル、音楽などに没個性が見られるようになってきたと感じる。

しかし、私がもし制作に携わる仕事に就いたとしよう。その時、需要と供給を無視して、自由に個性を表現できるかという、それは私にはできないと思う。どうしても他人に評価されたい、という承認欲求は私でなくとも少なからず誰かに存在していると思うからだ。その欲求に負けて、没個性化した、流行に見合った作品を作ってしまうかもしれない。

私は今、社会に出る前の、ある程度作品に対してわがままが通る、高校という環境が与えられている。だからこの時期に、きちんと自分を主張し、見る人をないがしろにしない作品を、精一杯作っていきたいと思う。



図2 高浦実央 「造花」
F100号、パネル、油絵、2013年

なぜ人は、美しいものを好むのか。なぜ美しいものを称えるのか。逆に、なぜ美しくないものを白い目で見るのか。私はこれから美術というものの表裏を自らの体験を交え考えていこうと思う。

美術について疑問が生じ始めたのは、中学生時代の美術の授業を受けていた頃だろうか。小学校での「図画・工作」から「美術」へ。おそらくその頃の僕にとってはまだ美の意味がかすみかかったような状態だったであろう。ものを作ったり、絵を描いたりしてうまいかどうかを計る。それが美の概念だった。周りの者の中でいわゆる「美術の先生に評価される人」がだんだんはつきりしてくる。残念ながらその部類ではなかった僕は、どうにか彼らのようになりたいと、彼らの絵や作品を見た。おおむね気付いたことと言えば、繊細であったり、柔らかなタッチであったり、堂々とした色の配置であったりしたことだ。それらを真似して自分の技術としてキャプチャしたつもりで描いた。結果、僕は美術の先生にほめられるようになった。しかし、どうしても自分の思い描く作品ができなかった。技術を活かすところだけ考えて、原点であるアイデアや自分らしい発想を疎かにしていたのだ。

「美術」とは一体何なのか。

『美術は、視覚によってとらえることを目的として表現された造形芸術である』とウィキペディアという一種の百科事典サイトには載っていた。確かに、英語でファインアートと言われるように、良い、美しい美術作品が美とされるのは大いに結構なことだ。ところがそれを美と

決めるのは果たして誰なのか。先生あるいは美術の専門家か。それとも作品を見る人か。多くの人がこのうちの誰かだとすると思う。しかし、僕は否だと思う。僕が思うのは、作品を作った自分自身だ。

そして、美に関するおかしな事例がもう一つある。以前、ネット上でカンボジアの子供が描いたという絵画が載っていた。その絵画は美術の技術は明らかに高いとは言えず、むしろ誰もが一般的に「下手」と称するようなものだった。ところが、僕はその絵を見ると不思議な暖かさを感じたのだ。人間とおぼしき棒と丸と点。薄緑で少し雑に塗られた地面。濃い赤で象られた大きな太陽。各々の物体には笑っているような線が書き込まれており、空白を埋めつくすように描いた子供たちの手形が押されていた。ネット上のコメントの評価ははっきりと二分されていた。

「斬新なアートだ。すばらしい。」や、「カンボジアの美術に感動。」などの良評価コメントがある。これには疑問がある。この絵がアートなら、子供のいわゆる落書きと言われるものもアートではないのか。確かにこの子供たちは、誰かは知らないが、誰かに自分たちの何かしらの思いを届けたかったのかもしれない。しかし、他の子供たちが、一般の子供たちが僕たちに描くものに何か思いを持っていても、それは落書きなのだろうか。カンボジアが特別な条件ではないはずなのに、認められるものと、認められないものがあるこの不可思議なシステムに僕は首をかしげる。一方、こんなコメント

もある。

「レベルが低い絵だな。」や、「こんなもの、芸術性が感じられない。」などだ。心無い言い方に見えるが、本質的にはありのままのことを述べているのだ。画家たちの世界から見ればレベルの低さ、芸術性の無さは一目瞭然のはずだ。だが、やはり僕はこのように、他人が認めるか認めない美術を嫌悪する。他人主導でそのものの価値や本質を決めつけるのでは意味がないと思う。つまり、美術作品とは、作者が「この作品こそが自分の思い描く美だ」と言えるものだと考えているのだ。小学生の粘土細工も、僕ら高校生の似顔絵も、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』も、フェルメールの『青いターバンの少女』も作者が美だと思えば美として認められるべきではないのか。それぞれが心で感じた何かをもって描いた。その何かを評価するのではなく、その何かを想像し、作者の感じた世界を共有する。それが本当の美術の醍醐味だと僕は主張したい。上手下手という一点の見方から、その作品の表す何か、またその作者の込めた思いなど、立体的な多数の見方を使いこなす目を持ってほしいと願う。

未来の美術は、全ての作品の思いが鑑賞した人々全員に自然と伝わるような柔軟なものであってほしい。

中学生のころ、美術の授業の中で「ゴミ」を作った。と言うと妙な感じがするかもしれないが、私が作ったものは間違いなく「ゴミ」であった。制作工程はシンプルとは言えないものだった。まず、物を破壊するところから始まる。古くなった携帯電話やゲーム機、もう使わないおもちゃなどを生徒が持ち寄り、ぶっ壊す。かなづちやニッパー、そして電動カッターやライターなどを駆使して、私たちはひたすら物を壊し続けた。もちろん、先生の指示通りに。それは異様な光景だっただろう。この作品には、それぞれにテーマがあった。私はテーマに「レンズ」を選んだ。そんなわけで私はデジタルカメラ、双眼鏡、メガネを主に破壊していた。次の工程に進むためのチェックを受けに行くと、先生はこう言った。「まだまだ綺麗や、もっと壊せ。」およそ先生の発言とは思えない言葉だったが、私はなんだか嬉しいような気持ちになった。なにしろ、今の今まで「物は大切にしなさい」と教えられてきたのだ。不思議な感覚に陥りつつも、気持ちは高ぶっていた。破壊作業が終わり、もはや原型を留めていない物たちは、B5のノート位の大きさの土台に、粘土でくっつけられていった。ネジやクリップなども、一緒に土台に乗せた。この時点では、白い粘土と危険物の塊にしか見えず、自分でも何を作っているのか分からなかった。次の工程は色塗りである。「とんでもなく汚い色を作れ。」という指示のもと、

私たち生徒は作品に色をのせていった。泥のような暗い色を作ることは案外難しかったのを覚えている。一色だけではなく、何色も汚い色を塗り重ねることで、作品の迫力がどんどん増していくのが分かった。私が作品製作を通して初めて負から正への転換をみたのは、このときかもしれない。仕上げとして、粘度の高い金色の絵の具とニスを、作品の角や凹凸部分にさっとはたいた。作品を眺めると、そこにはざっきまでのヘドロのような姿はなく、凛々しくたたずむ金属に姿を変えた「ゴミ」が存在していた。金色絵の具の光沢感とニスの艶とが作り出す外形は、まるで錆びついた金属だった。あの柔らかい紙粘土でさえ、溶け出した鉄のように威圧感を放っていたのだ。作品に手を触れ、持ち上げてみるまでは本当に金属になったのかとも思ったほどである。

後日、クラス内での作品鑑賞会が行われた。友達の仕事を見るのもまた興味深かった。もちろんゴミなのだけれど、ゴミと言うにはもったいないほどの力強さを感じた。授業の最後に、私の作品に対する友達からの評価が書かれたプリントをもらった。「見ていてわくわくした」「あまりの迫力に圧倒された」などと書かれたプリントを見て、私は今までになく嬉しくなった。ほんの数週間前まで廃棄される予定だった物の数々が、形を変えることで人を楽しませ、感動させているのである。それが「ゴミ」だったとして

も...

私はゴミアートを通して、「破壊」からの「誕生」を知った。2011年3月11日。あの日テレビで目にした悲惨な光景——。波が引いたあと、路上に転がる瓦礫や土砂たちが今、私に何かを訴えているような気がしてならない。震災によって失われてしまった東北の街並み、そこに住む人々の心。これらの傷が癒えるには、まだまだ時間が必要なかもしれない。私は日本人の一人として、微力ながらも何か彼らの役に立つことがしたい。今の私に出来ることは、ゴミアートと出会って知った「創造」の素晴らしさを、東北をはじめとする日本中に届けることだと思う。何かを作り出すことは、壊すことの何倍も難しいことである。私は作品製作を進める中で、強くそう感じた。しかし、創造は人間にしか出来ないものなのである。ときに力強くあり、ときに感動的であり、人を励ますことができるもの。それこそが「創造」だと思う。震災からの復興が急がれる日本だが、「創造」を大切に以前のような、いや、以前よりさらに美しい日本になることを切に願う。最後になったが、ゴミアートに出会わせてくれた中学校の先生には感謝している。

「白」

私が小学生の頃、クラス内で話題になったことがある。

「白は色である。」「白は色でない。」白は赤や青のようにチューブが存在し、他の色のように画面に描くことができる。しかし、白は描く前から存在している。この矛盾した疑問は答えがでないまま、なにも無かったかのように私たちは新しい話題の話をし始めた。

「きわの処理が足りない。」

デッサンをしていると先生が私に言う。私はデッサンをしている際、モチーフのまわりがぼやける癖がある。

「空気感がある。」

これもデッサンをしていると先生が私に言う。

どちらも私は違うようで同じではないかと思う。

「モチーフ」

私にとってモチーフは石膏像、植物、布といった静物、それと空気だと思っている。

人は空気は実際目には見えない、と思いがちだ。

しかし、山や建物をみると、手前は色や形がはっきりし、自分から遠くなるほどその色は手前と比べ薄く、形がぼやけて見える。

つまり山と山、建物と建物の間には空気が存在して、人はそれを青白いと判断しているのではないだろうか。

したがって、白というものは物の遠近を表現するための重要な役割なのである。

白は描く前から存在している。つまり、描く前から「空気」というモチーフで画面に存在しているのだ。私にとってデッサンとは、もともと画面上に存在している空間をいかに壊さずに、そこに石膏像といった目に見えるモチーフを写実的に描き起こすかだと思っている。

私はデッサンについてもっと調べようと思い私は図書館へ行き資料を集めていると一冊の画集に出会った。

—ウォーターフォール—

私はこの千住博という日本画家の作品を見た瞬間、ほかの作品と違うものがあると感じた。

高校2年になって日本画を専攻し、日本画は花や葉といった植物、女性や子供、といった何かおとなしいイメージがあった。実際、日本画家の作品は美しく静寂な雰囲気のものが多かった。また、彩度の高い色から低い色まで使われていて、華やかである。

しかし、彼の作品は他の作家の作品の持つ物体の美しさだけでない。「音」が聞こえるのだ。彼の作品の特徴として私が最初に感じたことは、「色数が少ない」ということだ。

ウォーターフォールはその中でも特に色数が少なく、黒と白のみで力強い滝が表現されている。本のなかに描かれている滝の作品の隣に千住さんの言葉が書かれていた。

「滝というのは、明があり、暗があり、生があり、死があり、静があり、動があり、希望があり、絶望があり、黒があり、白があり、生命があり、そして生命のない闇がある。」

滝の叫びが彼の作品から滲みでている。この叫びは悲しみでも怒りでも、喜びでもなく私は「生きている」とこの地球で叫んでいるように感じた。作品が話しかけている、こんな感覚は初めてだった。

「作品が話をしている。」これも彼の作品の魅力である。

滝という白が深い大自然という黒に言葉をおいていく。

それを私たち作品を見る者が感じ取る。

小学生の時に答えが出なかった疑問、「白」というものは色であるか色でないか、私は、白というものは作品の言葉を代弁するために色で表現する媒体なのではないかと思う。

他の作品にしてもそうだ。

「L i f e」という砂漠の作品がある。これは先ほどの作品と違うところがある。

「生」と「死」だ。

ウォーターフォールはどちらかという生命の力強さ、叫びが伝わってきた。しかしL i f eは死に近いものを感じ

る。空気が澄んでいて、白が過去の経験を思い出し、どこか寂しさを感じる。静かな砂漠の世界で自分が独り、立っている。

冷たさの中に自分という暖かさが立っている。

「自分は生きている。」

二つの異なる作品であっても最終的には「生きている」という言葉にたどりつく。

大自然と滝、砂漠、生命のないモチーフに生命を吹き込む、今までデッサンなどで生命の無いモチーフをモノとしてとらえていた私にとって生命の無いモチーフに生命を吹き込むということはとても新鮮だった。

少し前から私はデッサンという黒と白の空間が親しみやすい場所だと思うようになった。

その中にさみしさ、怒りなどの感情といった見る人々に訴える言葉が存在する、そこに私は魅力を感じている。白という言葉の媒体となるものに自分の手で一線一線黒をおいていく。

あの作品に出会い、きわの処理を十分にすることだけでなくモチーフの存在、白という空間の中にいるということから考えていこうと思った。

元々色のあるモチーフをモノクロの世界で成立させ、白を語らせる。

そんなデッサンがとても魅力的で、そんなデッサンがすきだ。

そして、その黒と白の世界を描き、会話できるようにすばらしい生命ある作品を制作したいと私はそう白へ語った。

優秀賞

私のなかのどんぐり

菱沼 理来 光塩女子学院高等科 2年

私は2～3才の頃から、ものづくりが大好きだった。それはなぜかと聞かれても自分でも分からない。とにかく好きだった。出来上がったおもちゃで遊ぶよりも、何の変哲もないものを切ったり貼ったりして、自分の思い描くものにしていく作業の方が断然夢中になれた。

次第に、「家族を喜ばせたい！」という気持ちから、家族へのプレゼントとしてのものづくりが始まる。家族全員の誕生日はもちろん、母の日、父の日、クリスマス…と、結構行事はあるもので、私は年中何かを作っていた。(例1・例2・例3) 渡す相手のデザインの好み、使い道などを頭に浮かべながら、私自身の何かしらのこだわりもプラスされた。だれかのためのものづくりではあるが、実は私の作りたいものでもあったわけだ。長年に渡りそんなことを繰り返して、学業や部活に忙しくなった現在も、リビングを彩る我が家のカレンダーは私が毎年作っている。

また、学校の美術も大好きな時間で、初等科6年生の時の“掛け時計をデザインする”という課題では、当時うちで飼っていた手乗り文鳥のピーチがあまりにもかわいくて、「ピーチをいつも感じることでできるような掛け時計が作りたい！」というイメージで制作した。それは自分でもなかなか気に入っており、今はもう本物のピーチは天国に行ってしまったが、掛け時計となって、私の部屋の壁で元気に羽ばたいている。

そんな私の制作物の中で、『どんぐり小学校』と『森のひみつのキャンプファイアー』は忘れることのできない作品である。高等科2年生になった今、私はこの2作品について考察し、ある重要な発見をすることとなったのである。

『どんぐり小学校』は、初等科1年生の時の秋の自由工作で、特にテーマは与えられていなかった。私はどういうわけか、自分が通う小学校の先生と生徒がどんぐりになった光景がひらめいた。そこで靴が入っていた空箱の中にどんぐりたちの教室を作った。学校で展示されると、先生方や友達から多くの反響をいただいた。さらに、来校されたお母さんたちも声に出して絶賛して下さった。私は本当に嬉しかった。

そして、『森のひみつのキャンプファイ

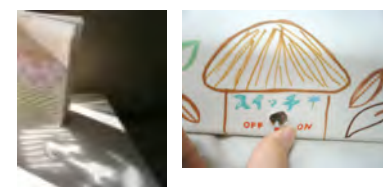
アー』の方は、初等科4年生の時に、国立科学博物館で募集していた(株)maxell主催の『キッズ電池工作コンクール』に出品したものである。森の絵を側面に描いた四角錐型の箱の上部に覗き穴を開けた。中には枯れ葉などでデコレーションして森を作り、その中央でどんぐりたちがキャンプファイアーをしている。火は赤セロファンと枯れ枝の中に仕掛けた豆電球をスイッチによって点燈させて表現。覗き穴を覗いた時は中は真っ暗だがスイッチを入れた瞬間、赤々と火が燃え、森の中のどんぐりたちのささやかだが楽しそうなひと時がこっそりと垣間見える。この作品も審査員の方々に感動していただき『メルヘン賞』をいただいた。こちらも本当に嬉しい出来事だった。

この2作品は、私の幼い頃からの作品の多くとは異なり、だれかへのプレゼントとして作ったものでもなければ、何かに使う道具的要素をもったものでもなかった。それなのに多くの方が感動して下さったわけはいったい何なのか…？私は、これらを制作した時の発想の源が私自身の感動体験にあったのではないかと、という点に注目した。

我が家では、私が1才の時から毎年キャンプを楽しんできた。森において、木漏れ日、川の音、水の冷たさ、草を踏む感触、鳥や虫の声、満天の星空…ひとつひとつはすべてが『本物』の自然であり、五感で受けた感覚は小さい私の体にも確かに染みついていたのだと思う。そんな感動の記憶が無意識のうちにこの2点を制作した時のイメージへとつながり、かたちとなって表現されたのかもしれない。そして、その私の『自然』へ対する思いが作品を見て下さった方々の心に響いたのではないかと考えた。

私の、まだまだ浅い人生の中でかなりのウェイトを占めていた『大自然に触れた感動体験』というものが自らの感性を形成する大きな材料となり、『アート』として発信された時、それがまた、見る人の感性を刺激する結果となった、と考えると、これはまさに人間でしか味わうことのできない『感性によるコミュニケーション』であると思った。

これから先、私はどんどん前向きに、できる限り多くの経験をしていきたい。



(左上) 例1 姉の机の上を飾る洋梨型の消しゴムケース
(右上) 例2 父のPC机を飾る影アートのできるノート
(2段目左) 例3 母へのミニ宝石箱
(2段目右) ピーチの掛け時計
(3段目3枚) どんぐり小学校
(4・5段目3枚) 森のひみつのキャンプファイアー

見るもの、聞くもの、出会うものすべてにアンテナを張り巡らし、かかわり、チャレンジし、そしてさまざまな感動を体験したい。それらが、私という人間のユニークな感性を育てる栄養になると信じているから。どんぐり2作品は、将来『モノづくり』に携わる仕事に就きたいと考えている私にとって、きわめて重要なことに気づかせてくれたと言っても過言ではないだろう。

優秀賞

私と「無限カノン」

松本 菜々子 愛知県立岩倉総合高等学校 2年

私は、あいちトリエンナーレに行きました。今回、「現代美術」というものに触れるのは初めてでした。私の勝手な「現代美術」のイメージは、「抽象的で何が描かれているかはわからない」「題材が大きくて何かを訴えている」「色が奇抜」など、その作品を見て自分で作品について考える、作品を見る人に意味を任せる、という難しいものだと思っていました。しかしあいちトリエンナーレで出会った現代美術が、私に新しいイメージを与えてくれました。

その展示場で、コーネリア・パーカーさんの「無限カノン」に出会いました。この作品にあって私の「現代美術」のイメージががらりと変わりました。前述の通り私は「現代美術は難しいもの」としていました。しかし、この作品を見てから「現代美術は身近で、どこか人間味があるもの」ということに気付いたのです。身近というのは、私たちの近くにあるものを使っていたり、近すぎて気付かなかったことを題材にしたりしているということで、人間味があるというのは作者にとっての懐かしさや、人と人との関わりが感じられるということです。

「無限カノン」の展示部屋は、黒いカーテンで仕切られています。その閉ざされたカーテンを開けると、金管楽器の影が周りの壁にぼんやりと映っています。部屋の中心には、円状に並び吊るされた様々な種類の金管楽器が、その中心にある光源からのやわらかい光に照らされていました。

私はこの作品にぬくもりを感じました。光を使っているというのもそうですが、何より影に暖かみを感じました。何故かという壁に金管楽器と自分の影が一緒に映るからです。自分と今にも高らかに音を出しそうな楽器が一体になっている感じがして、音楽と美術と、自分が

共存しているような気持ちになりました。

しかし近づいてみると驚くことができました。なんと楽器がすべてぺっちゃんこに潰されていたのです。形はそのまま、まるで大きなタイヤで轢かれてしまったような薄っぺらい楽器がきらきら光っています。これでは音を出すことはおろか、吹くことも出来ません。私は少し残念に思いました。

この作品は1つの作品で対比が生まれています。あたたかい光と冷たい金属。音が出そうな楽器と、もう使うことの出来ない楽器。落ち着いた日常でもあってどこか不思議で非日常的でもあります。

ではなぜ陽よりも「影」の方をいきいきとさせているのでしょうか？

それは生と死を思わせるためではないかと思います。実は死んでいるけど影では生きている、または、壁の影の中の世界では生き返っている、生涯を終えた後もなにか違う形で残っていく…生と死の循環やぐるぐると変わる世の中を「円」で表しているのではないのでしょうか。

そこで「無限カノン」の意味です。

「無限」とは前にあった通り、無限に繰り返される生と死の循環であるという意味だと思っています。そして「カノン」とは音楽用語で『複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する』という意味だそうです。これを作品と重ねると、複数の声部は様々な種類の楽器、異なる時点は変化してゆく時代、そして演奏する、はそのまま、あの楽器たちが再び鳴り出すという意味が裏付けられているのだと思います。

生死をテーマにしている、と思っても私はなぜかあの空間が心地良く思いました。落ち着くとかやはりぬくもりがある。そして1つ、魅力を感じた所がありました。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

それは『絶対どこかの楽器が光って見える』という所です。楽器は円状に並んで浮かんでいます。つまりどこから見ても正面の楽器とその向こうにある楽器が見え、向こうにある楽器は中心からの光に照らされてきらきらと輝きます。

そして私は思いました。なんのためにパーカーさんが楽器を潰したのかはわからない。だけどその楽器を潰したのは決して楽器が憎かったり、ただ意味もなく潰したりしたわけではない、と。

なぜならその潰されている楽器から反射された光は、まるで希望を持たせてくれるような眩しさだったからです。

だから私はテーマを知ってもこの作品に惹かれ、この作品の置かれた空間が神秘的に思え、この作品のぬくもりを感じ取ることができたのだと思います。

私は「無限カノン」に出会って美術というものの広さや深みを感じました。作品に触れ、自分なりの解釈を考え、そして自分に何かが訴えかけられるというのは初めてだったからです。美術を学ぶ者としてこの感覚を忘れないようにしたいです。またこの作品のような、自分の思っていることや感じたこと、誰かに訴えたいことが、観た人にぬくもりや落ち着いた神秘を帯びたものとして伝わるような空間を創り出してみたいです。

引用・参考資料

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%8E%E3%83%B3_\(%E9%9F%B3%E6%A5%BD\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%8E%E3%83%B3_(%E9%9F%B3%E6%A5%BD))

優秀賞

私の私への鑑賞文

宮嶋 風花 北海道札幌平岸高等学校 3年

私の作品はカラフルなのに、ネガティブで奇妙なものばかりだ。作品を作り終わった時、私はまるで記憶が飛んだかのように、決まって自分が何を考えてこれを描いたのか疑問に思う。「この作品の説明をしてください」と言われても、自前にじっくり考えて文章を書いてこなければ説明が出来ない。自分の作品をまるで他人の作品や、初めて見る作品のように鑑賞するのだ。作品を作るたび、私はこの不思議な感覚に魅了される。

例えば、高校生国際美術展に出品した『通勤ベイビー』という作品(図1,図2)。カラフルなスーツを着ている赤ちゃんが忙しく歩いている中で、一人だけ地味なスーツを来た赤ちゃんが、驚いたようにこちらを見ている作品である。正面を向いている赤ちゃん以外は幻想であるかのように、上からキラキラのラメが塗られている。この作品の説明文のところに私はこう書いた。「現代社会では若い頃の詰め込み学習が重要視されている。私も実際に、毎朝小学生がサラリーマン達と一緒に満員電車で通学しているのを見る。機械的になってしまった人間の冷たさを、赤ちゃんを通して表現した。」しかし、この文章を書く時点で私はもうこの作品を描いていた時の自分の頭の中を再現出来ていないのである。つまり、この文章は、単なる自分の鑑賞文や推理でしかないということだ。一つ一つのスーツの模様の意味や、立ち止まり正面を向いて恐ろしい顔をしている赤ちゃんの気持ちなど、今の私には到底理解出来ない。でもその全てに私は確かに意味を与えて描いていたのだ。絵を描いている時は、何かが私に宿っていて、力を分け与えてくれていると感じるほどである。この絵には私に何かが宿っている時の一瞬の気持ちがあらわれているのだ。だからその感情を言葉になんてできるはずがないのだ。

高校生文化連盟に出品した『微睡み』という作品(図3)。カラフルなたくさんのバクが、私を浸食しているようで、私をかたどっているように見える作品である。この作品を描いた時も色々な人に「どんなコンセプトで？」と聞かれた

が、「バクと言う名の悪夢を食べるバクテリアが、私の内側で増殖しているのだ」と、曖昧にごまかした。たまたまその時私が、バクテリアが脳を浸食して死に至らせる病気にかかった少女が登場する小説を最近読んだのを覚えていたから、描いている途中にバクという言葉と結びついただけだった。次の文章は、自評文に書いたものの一部である。「情報が錯綜している今の世の中で、自分というものが実は気づかないうちに浸食されているのではないかと感じ、ヒトという動物の死の瞬間を描いた。生き物の輪から外れた、機械でも動物でもない自分に対する不気味さを表現したかったので、サイケデリックアートを参考にした。」確かに私は死の瞬間や現代社会への皮肉を作品のテーマにしようと考えてエスキースを描いた。だが、最初からサイケデリックアートを参考にしたかったわけではないし、その言葉を知っていたわけでもない。エスキースを描いていたら父にサイケデリックアートみたいだねと言われたから調べてみただけである。

親戚のおじいちゃんやおばあちゃんには「なんか垂れてて気持ち悪い、ホラーだね。」と言われたし、高文連時に行われた他校の先生による講評では、「口からたれてるのが真ん中で色も目立ち、そこに目がいってしまってもったいない。」と言われた。それらに対抗して「口からアクアグリーンのブツブツとした液体が流れているのは、ヨダレ(=ヒトの本体)の最後の一筋を表現した。」と、書こうかと思ったがやっぱりやめた。講評の時から私なりに考えて出した答えがこれだったが、こんなに詳しく書いてしまっただけで、この作品を描いた時の私に怒られそうだし、第一作品との何かがズレてしまいそうだったからだ。でも、私はこの口からたれているものを、粗末にされてはいけぬような気がしたのだ。言葉では表現出来ない、して



(図1)『通勤ベイビー』 アクリル B3 2013年



(図2)



(図3)『微睡み』 アクリル B1 2013年

はいけないような大事な何かを、そこに感じたのだ。

私は自分の作品から学んできたことがたくさんある。私は何が好きで、何をしたいのか、何を抱えているのか、何が得意で、何が苦手なのか、何をしてきたのか。私が今まで聞いてきた音やにおい、体験したこと、そこで感じた様々な思い、私の中で美しかったもの。分からなくても作品を作って、考えて、説明をして、そこで思考が作られていた。私が作ってきた作品は全て、カラフルでネガティブで奇妙なものである。でも、その中に言葉では表現出来ないような「何か」を感じるのだ。私はこの「何か」を、これからも作品を作り続けて感じていくとともに、私の一部として大切にしていきたい。

優秀賞

私と「うどんげの花を植える女」

山田 美羽 愛知県立岩倉総合高等学校 2年

私がこの作品に出会ったのは、高校一年の夏、岐阜県美術館でのことだった。それを見た時、私はとても複雑な感覚に陥った。作品の前に立ち止まりずっと見ていたいような、反対に作品の前からすぐに立ち去ってしまいたいような、そんな感覚だった。見ていてあまり気持ちのいいものではなく、むしろ気持ち悪いとさえ思ったが、私を惹きつける何かがあるにはあった。

この作品を描いたのは岐阜県出身の日本画家、川崎小虎である。同じく日本画家であった祖父の川崎千虎に大和絵を学び、祖父の没後は千虎門下の小堀軯音に師事していた。「うどんげの花を植える女」は1912年に描かれたもので、作者が1886年から1977年まで生きたことを考えると、初期の作品だと言える。作者は初期では大和絵を基調とし叙情的な作品を描いたが、晩年では身近な自然や動物などの素朴な主題を描いている。

さて、この「うどんげの花を植える女」という作品は本当に何度見ても奇妙な絵である。長い髪を垂らし、白い服をきた女がうどんげを植えている。うどんげとは、他の物に産み付けられたクサカゲロウという昆虫の卵塊のことをいう。長い柄の先に1つずつ卵塊が付いたものが、時には数十個まとめて産み付けられる。「うどんげ」という名前は法華経に出てくる、3000年に一度如来が来るとともに咲くといわれる伝説上の花に由来しているようだ。地域によって異なるが、吉兆や凶兆として伝えられてきた。そんなうどんげを植えている女性。単純に考えれば、彼女はクサカゲロウのメスで、その卵を産み付けているということになる。大きな半透明の羽や、そのひょろりと細い体や、どこか儂げな雰囲気もまさにクサカゲロウである。彼女が左手に持っている瓶のようなものの中身は大量の卵であろうか。

たとえば、彼女の背に羽が描かれていなかったとする。すると途端に彼女は

メス”ではなくなり、“如来の訪れと共に優曇華（うどんげ）を咲かせる女”へと変化をとげる。持っている瓶の中身はもちろん“卵”ではなく“種”になる。「うどんげの花を植える女」という作品名だけを聞いたら、こちらが思い浮かぶのではないだろうか。なんせ“花を植える”である。しかし作者が描いたのは“卵を産み付ける”だった。では作者はなぜ卵を産み付けるクサカゲロウを描いたのだろうか？

私はまず生命の誕生だとか、繋がりだとか、母の偉大さだとかそういうものを描きたかったのではないかと考えた。少々短絡的かもしれないが、彼女を母、うどんげを子として捉えるならばそれが一番しっくりくると思ったからだ。しかし、母子の関係を描いた絵にしてはどうにも不気味である。もう少し微笑ましくても良かったのではないかと思う。もちろん、母子の関係が微笑ましいものだけではないのも事実だ。人間ならともかく、ましてや昆虫ともなると生きるか死ぬかの世界である。私はふと、高校一年の時に国語の授業で習った吉野弘の「I was born」という詩を思い出した。それは少年とその父の会話を中心とする散文詩だった。英語を学習したての少年がある妊婦とすれ違った時、日本語でも英語でも「生まれる」は受動態であるということに気づき、一緒に歩いていた父にその発見を伝える。父は少年の言葉を受け、かつて友人にすすめられ観察したカゲロウの話をする。カゲロウはものを食べないため口がなく、成虫になってからの寿命も短い。顕微鏡で観察したカゲロウの腹には無数の卵が詰まっていた。そのカゲロウの観察から数日後に母が亡くなったことを父は少年に教える。少年は、自分の肉体が母の胎内を満たしていたことに思いを馳せる…というような内容だった。カゲロウが出てくる点や、母子の関係など通じるところがある。カゲロウといっても、ここででてくるカゲロウとうどんげのクサカゲロウとでは少し

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

川崎小虎「うどんげの花を植える女」
80.0x51.0cm、紙本着色、1912年

分類が違うようだ。

そして次に、前述した「地域によって異なるが、吉兆や凶兆として伝えられてきた」ということに注目してみる。はっきりとした資料が見つからなかったため断定はできないが、もし仮に作者の出身地や関係のある地域でうどんげが凶兆とされていたならば、この絵が不気味なものも納得できる。いかにも良くないことが起こりそうな雰囲気である。

私が考える限りではこの2つのどちらかということになる。しかし作品をじっくりと見ているうちに、女性の口元は少し微笑んでいるようにも見えてきた。その微笑みは我が子に対する愛情ゆえなのか。良くないことを前にした不敵な笑みなのか。はたまた吉兆の微笑みなのか。やはり作者の真意にたどり着くのは難しい。きっと私では考え付かないことや様々な思いで出来上がったものなのであろう。これはどの芸術作品でも言えることだ。そのたくさんの思いのなかに、私の考察と重なるところが少しでもあれば嬉しい。

引用・参考資料

「川崎小虎」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B7%9D%E5%A8%91%E5%B0%8F%E8%99%8E>

「うどんげ」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%86%E3%81%A9%E3%82%93%E3%81%92>

「クサカゲロウ」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%82%B5%E3%82%AB%E3%82%B2%E3%83%AD%E3%82%A6>

「I was born」

http://ja.wikipedia.org/wiki/I_was_born

8月の終わりのことだ。高校3年生の夏休みに、愛知芸術文化センターで僕はある作品について、自分の思ったことを多くの高校生のまえで語ることになった。

「Melting Point」それが、作品の名前だ。

6月まで、話は遡る。僕は、今年開催される芸術祭「愛知トリエンナーレ」で、高校生ガイドとして関わる事になった。本番に備えて何回かの練習をした後、8月10日にガイドをする作品を決めるために、ぼくは愛知芸術文化センターにやってきた。そのとき、何気なく気になったのが、この「melting point」だった。フランス・パリ出身の写真家ステファン・クチュリエの作品で、ブラジル、スペイン、インド、キューバで撮影されたものだった。

一見普通に見える町並みを写した写真達。だが、昼休みを挟んで再び見に行ったとき、僕はその写真の不自然な点に気がついた。スペインの写真の右側中央にある窓には、何もついていない。しかし左側中央にある窓には、庇（ひさし）がついている。どうやらこの二つの窓はそれぞれ違う建物のものであるようだ。いくつかの写真を合成して作られた。作品の説明欄にそう書かれていた。しかし、昼休み前に見に行ったときには、そんな秘密があるとは全く思っていなかった。それだけ、一見、普通にみえてしまう写真なのだ。

僕は疑問に思った。「なぜ違う写真を合成しているにもかかわらず、一見普通の写真に見えるのか」「なぜクチュリエさんは、写真を合成させたのか」スペインの写真の右下に、鉄の柵と白いデザインの全くちがう柵が重なった部分がある。しかし、このふたつの柵の幅はほとんど同じであるため一見不自然には見え

ないことに気がついた。では、なぜ素材も見た目も違う柵の幅が同じなのかを考えると、柵は人が落ちないようにするものでありつつ、景色を見るのに適した高さでなくてはならないことにまた気がつく。つまり、高すぎても低すぎてもダメで、そのため、どうしても決まった高さになってしまい、その高さが代々受け継がれていくのではないかと。そんなことをあれこれ考えていると、この作家さんは「世の中には、変わるものと変わらないものがある」ということを伝えたかったのではないかと自然と考えるようになった。いつのまにかその作品について、深く考え、人に伝えたいと思う自分がいた。

だが、自分は最も重要なことに気がついた。それは、ガイドをする相手が自分と同じ「高校生」である、ということだった。はたして、もし自分がガイドを聞く側だったとしたらどう説明してもらいたいか、そんな事が頭のなかに浮かんだ。もっとわかりやすくする必要があった。それが結論だった。そんなとき真先に思いついた用例が「マンガ」だった。マンガはこの数十年の間に、絵柄や画風がかなり変わり、少年マンガや少女マンガなど様々なジャンルの作品が発表された。しかし、マンガのふきだしの形を思い浮かべてみると、ふきだしの形はこの数十年の間でほとんど変わっていない。またどんなジャンルの作品であろうと、ふきだしの形はほぼ共通している。この、ふきだしの形が変わらないということも、それが、人がしゃべっている事を表すのに最も適した形として、自然と受け継がれてきたためなのかもしれない。「デザインや流行のように変化するものがある、柵の幅などのようにひっそりと受け継がれているものがある、不変というものがある」ということを作家さんは、建物を使うことで言いたかったのでは。どんどんセリフが、頭上に

浮かび上がってくる。

「変化というものを、一番人の心に残る形で表現したかったのではないか」もうひとつのセリフが、また頭の中に浮かんできた。例えば、変化という言葉写真で表現しなさいという問題があり、おたまじゃくしとカエルの写真をならべたものを作ったとする。しかし、おたまじゃくしがカエルに変わることは当たり前のものであり、その写真が心に残るかどうかといわれると、おそらく残らない。しかし、この「Melting Point」のようにあえて違和感のある形で表現することで、心にひっかかる形で、自分のメッセージを伝えようとしたのではないか。

「自分のメッセージを、いかに人の心に残すのかを追究すること」が、現代アートの目的のひとつなのではないか。その一言が思い浮かんだ瞬間、僕の頭はからっぽになった。

8月の終わり。10日に思いついた言葉を、僕は多くの高校生の前で語った。その後説明を聞いた高校生が、それぞれ感想を言っていくという時間が設けられた。「柵の幅の話を書いた時、言われてみればそうだなと思った。」ある高校生がそう話した。メッセージが伝わる喜びを感じた瞬間だった。

10月。いま僕は、あのトリエンナーレのことを振り返りながらこの文章を書いている。「自分のメッセージを、いかに人の心に残すのかを追究すること」あの日はいろんな意味でそんな言葉と向き合った。

向き合えて良かった。

ふとそんな言葉が頭の中に浮かんできた。